

ふおーらむ

第6号



図書館サポートフォーラム

目次

《巻頭特集》

第11回図書サポートフォーラム賞授賞式	2
---------------------------	---

《文集》

井上 如 「方法としてのトショカン」	10
植村 達男 「詩人津村信夫の肖像」	12
恵光院 白 「かぎろひ紀行 —奈良県大宇陀の地へ—」	16
近江 哲史 「図書館のある風景（その三）」	18
門倉百合子 「いわきの図書館・博物館を巡る旅」	22
越山 素裕 「脳卒中からの復帰を目指して」	25
戸田 光昭 「図書館グッズと選挙グッズ」	28
平井 紀子 「あさがお日記」	30
水谷 長志 「能をまた観る日に」	32
山内 明子 「俳句八吟」	34
山崎 久道 「不機嫌な人々」	35

第11回図書サポートフォーラム賞授賞式

於／2009年4月14日（火）

喜山倶楽部 光琳の間（日本教育会館内9階）

1. 挨拶

山崎久道氏

（図書館サポートフォーラム代表幹事）

代表幹事を仰せつかっております山崎でございます。

恒例となっております図書サポートフォーラム表彰式も11回を数えることとなり大変ありがたいことだと思っております。

この賞につきましては、後で戸田表彰委員長から選考経過などのお話があるかと思いますが、図書館に関していろいろ地道な活動をなさっている方、あるいは図書館の活動を社会に広く周知することに力があった方、国際的な活動をなさっている方などいろいろな形で図書館の世界を外部に知らしめていると同時に情報面でいろいろな貢献をされた方を顕彰させていただくとともにこれを契機にますますご研鑽を頂いて成果をあげていただければ大変ありがたいと存じます。

今回も3名の大変すばらしい方を表彰させていただける事をうれしく思っております。

これから選考の経過あるいはそれに基づいた受賞者の方のスピーチがございますが、今回はそれに加えて特別表彰ということで末吉哲郎さんを表彰させていただきます。いずれにしても今回は4名の方に表彰の楯を差し上げることとさせていただきますので、是非皆様に表彰式を盛り上げていただければと思っております。よろしくお願い申し上げます。

2. 講評

戸田光昭／表彰委員長

私は、今回初めてこの表彰委員会のまとめとして、皆様にご紹介する役をすることになりました。

4人の方の表彰について最初に選考経過を申し上げて、それからすでに公表されておりますけれど、表彰理由を読み上げさせていただきます。最後に若干のコメントを申し上げたいと思います。

私の方からは3人の方について申し上げます。

す。末吉前代表幹事については特別表彰になりますから山崎代表幹事のほうから表彰理由を申し上げます。

選考の基準等につきましては、先ほど代表幹事の山崎さんのほうからお話のございました通りであります。今日表彰式にはじめて参加されるサポートフォーラムの会員でない方も居られると思いますので、図書館サポートフォーラムについて簡単に紹介させていただきます。

①選考経過

図書館サポートフォーラムは、1996年に発足した有志の集まりですが、図書館関連の職場から既に退職した人たち、あるいは他の職場に転出した人たちを中心としています。現在でも図書館関連の現場で活躍している方々をサポートしようという考えで作られました。そして、その活動の大きな柱として表彰事業があります。今回は第11回を迎えます。

表彰対象は原則として個人であり、最近では、団体、特に図書館そのものを対象とすることは、原則としてしないという考えで選考しております。（これは、図書館総合展などで、団体表彰が行われるようになったという事情もあります）

2009年2月24日、開催の表彰委員会において、ノミネートされた12候補について選考を行いました。その結果、藤野幸雄氏、木部徹氏、大森一彦氏の3名の方の表彰を決定しまし

た。

②講評

お手元に配布したのは、表彰委員会での資料と同一のものですが、それぞれの方々についての表彰理由と表彰の裏づけとなる資料がまとめられています。ご参照下さい。

それでは、表彰理由を読ませていただきます。

最初は、藤野幸雄さんです。

「国際文化会館図書室長の実務を経て、図書館情報大学教授・副学長、東京農業大学教授などを勤めた。図書館史、出版文化史の専門家として、『大英博物館』（岩波新書、1975年）から近著『図書館 この素晴らしき世界』までの70点以上に及ぶ著作は、『図書館についての啓蒙書』となっており、図書館の価値を一般の人にもわかりやすい内容で、語り続けている。」

藤野さんは、昨年、喜寿を迎えられました。その時に、ご著書がちょうど77冊になったという伝説があります。それほどに単行書としての著作が多い方です。図書館界でこれほど多くの本を出版している人は、日本には、おられないと思います。

このように、多くの著作があり、しかも教科書はほとんど無い。また、翻訳書もかなり少な

い。専門家だけでなく、一般の人にも読んでもらえる内容である。このような本を書ける図書館学者は、日本にはほとんどおられない。これが一番強調した点であります。

次は、木部徹さんです。

表彰理由を読みます。

「有限会社資料保存器材を創業し、新しい資料保存（コンサベーション）の実践に取り組み続けている。また、同社ホームページに、2005年から「ほぼ日刊資料保存」を立ち上げ、世界と日本の資料保存の動向を、広くしかも的確、迅速に、図書館、アーカイブズ、文化財関係者などに知らせている。講演、執筆など多数あり、主な著作には『容器に入れる』（日本図書館協会、1999年）、『図書館と資料保存』（雄松堂出版、1995年）、『IFLA 図書館資料の予防的保存の原則』（日本図書館協会、2003年）などがある。」

日本ではこれまで、図書館と文書館（アーカイブズ）の関係が良好であったとはいえないと思います。図書館に貴重な文書があると、歴史学者は早く図書館からそれらを救い出して、文書館や史料館へ入れようとしています。それほどに、図書館における文書（アーカイブ）の取り扱い（処理法）は問題があったのです。特に保存上の課題があったのです。これらに関して、木部徹さんは、保存器材という商品を通じて、そのハードとソフトの両面を、専門業者という立場を超えて、図書館関係者も含めて、講演、

執筆、編集・発行などの活動を通じて啓蒙、教育、研修を行い、特に図書館関係者に大きな影響を与えているのです。

三人目は大森一彦さんです。

表彰理由を読みます。

「東北工業大学附属図書館の司書として永く勤務し、また書誌の研究者・作成者として、40年をかけて作成した寺田寅彦の書誌（『人物書誌大系36』日外アソシエーツ、2005年）の他、中谷宇吉郎、マイケル・ファラデーなどの物理学関係者書誌を作成した。さらに、私立大学図書館協会文献探索研究会の通信会員として、会誌『書誌メモ』、『書誌調査』、『文献探索』に書誌と書誌論を毎号寄稿し、会員や書誌関係者に明確な指針を与えた。」

『書誌索引展望』（日外アソシエーツ発行）にも多く寄稿しておられましたが、この雑誌の編集母体であった日本索引家協会が解散してから、20年近くになります。この団体が存続していたら、大森さんも業績の多くを、この雑誌に掲載し、もっと多くの書誌索引類や論文を作成・執筆していたかも知れないと思うと残念です。

大森さんの論文には、書誌から学者の真の成果を探ろうという意図があるように思えます。研究業績リストに関するいくつかの論文において、そのことを扱っているのではないのでしょうか。（論文A7「研究業績リストの書誌的考察」、A9「研究業績リスト編集の標準化」）

また、『人物書誌体系36…寺田寅彦』は350ページ近くの大部ですが、あらためて読ませていただきたい書物です。レファレンスツールとしてよりも、読み物としての興味が一層深まりました。

③最後に

今回は、特別賞の末吉哲郎さんを含めて4名の方が受賞されました。フォーラム賞の第1回は4名でしたが、その後は前回(第10回)まで3名ずつです。それらの方々のうち、最近の5回分を『図書館関係専門家事典』(1984年、日外アソシエーツ)で調べてみました。第7回(2005年)は三分の二、第8回は三分の一、第9回は三分の一、第10回はゼロ、そして今回(第11回)は四分の三の方々、この事典に掲載されていました。

この結果は、様々の見方があると思いますが、積極的に評価すれば、この事典の有効性、つまり、現在でも、これは参考図書(レファレンスブック)として使えるということでありま

す。しかし、一方では、このフォーラム賞はユニークという面も強調していますから、この事典に掲載されていない人も、できるだけ広く対象とするという点では、前回の掲載者ゼロは、画期的な表彰だったという評価もできるでしょう。

この事典は、25年前の出版でありますから、

その時、生まれていなかったり、社会に出ていなかったりという人は掲載されていません。図書館関係専門家ということで、対象を絞っていますので、周辺領域の人も入っていません。

今年の受賞者は、それぞれに、図書館活動における大先輩であります。遠方からお越しいただき、表彰式にご出席いただけるだけでも、フォーラム関係者としては、大変に光栄なことです。ありがたいことであります。

本日は、本当にありがとうございました。そして、授賞を心からお祝い申し上げます。おめでとうございます。

山崎久道氏

(図書館サポートフォーラム代表幹事)

それでは末吉様の表彰理由についてお話ししたいと思います。

この中に末吉さんのことを知らない方はほとんどいらつしやらないと思いますが、慣例ですから、このような形で進行させていただきたいと思えます。

表彰理由として配られたものを最初に読ませていただきます。

末吉哲郎様

(前・図書館サポートフォーラム代表幹事)

「経団連(現・日本経団連)図書館で様々な

革新的経営やサービスを実践されるとともに、関連の専門家のネットワークを形成し、その中からJOINT(雑誌記事索引経済産業編)を生み出すなど図書館界において先進的な試みを数多く実施されました。また、企業史料、美術・音楽などの分野でも、団体運営の手腕をいかなく発揮され、こうした活動の充実に多大な寄与をされました。団体作りの集大成として創設された「図書館サポートフォーラム」では指導的な役割を果たし、独自のコンセプトに基づく「図書館サポートフォーラム賞」を提案されるなど、本会の運営に多大な貢献をされました。」

一言だけ付け加えさせていただきますけれども、末吉さんのこれまでの活動というのは、図書館を明確に社会の中に位置付けるこういう活動だったのではないかとというふうに思っております。

社会というのは、実はいろいろありまして、一般社会であったり、あるいはビジネスの場であったり、あるいは国際的な視野の中でそういうものを捉えて大変多面的な形で図書館というものの重要性をアピールされつづけておられるのではないかと思っております。

末吉さんが、先程団体作りの名手という話をよく言われますけれど、私は末吉さんご自身が団体みたいな方だと思います。末吉さんは、涉外から営業、企画まで全部お一人で出来るんです。末吉さんご自身がお一人の団体なのです。

一人団体だと私は思っております。全くユニークな才能を発揮されて、私達にいろいろな

ことを教えてくださっているわけです。

そのなかで、印象に残っているのは図書館を産業として捉えていることで、いまでこそ、その考え方はあたりまえのようになりまして、図書館に関連したデータベースのサイトでありますとか電子ジャーナルとか図書館システムとかあるいは図書館の委託など最近議論になっておりますけれど、そのような末吉さんの考えが実現してきたように思っております。

ただ図書館を産業として考えるというのは、今やいろんな人が言っているので何も末吉さんの専売特許ではない。私は末吉さんだけしかやってないことが1つだけあると思います。それは図書館をエンターテイメントと考えることなんです。こんな人は他に見たことがありません。

もちろんいい意味でのエンターテイメントです。要するに、そこでみんなが自分を自己実現しながら、そして何か楽しく、まわりも楽しくして幸せにしてゆくんだという精神で、末吉さんは、活動されてきた。その意味では末吉さんの前に末吉さんはいなくて、末吉さんの後にも末吉さんはいないというような、大変ユニークな業績を残されました。図書館の世界というものの幅を広げていただいたということで、私共としては大変感謝をしております。

このサポートフォーラムも先ほどから話のありましたように、末吉さんの卓抜したアイデアから生まれたものでありまして、今後ともこの会を発展させて、末吉さんの発案というものを大きく花開かせて生かしてゆくことが私達の使

命であろうと思っております。本日は末吉さん、まことにおめでとうございます。ありがとうございます。

3. 受賞の言葉

藤野幸雄氏（元図書館情報大学副学長）

はじめに大変縁起の悪い話ですが、本年初めから最近に至るまで私は知人友人を続けてなくしました。

それで大変気が沈んでいたところに今回このフォーラムの受賞という話をいただきました、気分が盛り返すまでとはいきませんけれど、持ち直しました。改めてみなさんにお礼を申し上げたいと思います。

ここにいらっしゃる皆さんのうちのほとんどの方、大勢の方は長い付き合いがあります。私がよほど長生きということになるのかもしれませんが、こうしてお目にかかれる機会をいただけたことにも感謝しております。

たとえば先ほど紹介をいただきました戸田先生、彼は、私が大学を出て、国際文化会館というところに勤め始めた50数年前、慶應の学生で慶應から次々に私の図書館を手伝いに来てくださった最初のうちの一人であります。その後ずっと続けて何人の方が手伝ってくださいましたけれど、特にお世話になったということがあります。

それから、やはり50年ほど前になるかと思えますけれど、末吉さん。私が初めて知ったときには既にもう経団連図書館の顔でありまして、大変な活躍ぶり、そして私自身も啓蒙していただいたものであります。

私自身、最近耳が聞こえなくなりまして、ほとんど家に居りますけれど、大したことをやっております。

つまり、耳が悪くなると電話が通じなくなる。TVが聞こえなくなると同時に音楽が音だけでありまして、駄目であります。となりますと今生きているのは目だけであります。もうすでに棺桶に片足を突っ込んでいるようなものがありますけれど、この機会に気力を持ち直してなにかやるかと思っております。私自身は、好きなことだけをやってきましたので、それを続けられたらと考えております。

1つだけ申し上げたいのは、今度ここに居られます末吉先生、彼が大変なアイデア男でありますから、今度この人がなんか引退したような話を聞きましたが、そんなことは許せないのであって、もっと活用してしかるべきであろうと思います。本日はそのために発破をかけに来たわけでありまして。簡単ではありますが、私自身は、まだまだ生きられるかどうかわかりませんが、末吉さんは、「末、よし」であります。更に長生きでき、良い仕事ができると考えております。続けてがんばっていただくと同時にこういう人をほっておく手はありません。まだ続けて活躍なさることを期待しております。本日はありがとうございます。

木部徹氏（有）資料保存器材

木部でございます。

突然スピーチを仰せつかりましたが、聞いておりませんでしたので大変緊張しております。

本日はありがとうございます。

ご覧になっておわかりになります通り、私一番はじつこに居るわけですが、自分自身どうしてここにいるのかなという気がずっとしております。

諸先輩といいますが、ずっと業績をあげてくれた方と並んでこういう賞をいただくということは、「絶対嘘だろう」という感じが今でもしているくらいです。

私の仕事というのは、図書館とかアーカイブの端っこのほうをサポートとか支えていくというような仕事で、多少なりとも日本では珍しい仕事をやってきたことが、まあ珍しさで選んでいただいたんだろうとは思っております。

藤野先生のお話を伺っております。私実は来年の3月に還暦を迎えるんですね。もうそろそろいいのかなあと思っております。会社なんかだともうそろそろ肩をたたかれる位の年齢になってきているんですね。

藤野先生のお話を聞いて思い出しました。今回の賞の最初の推薦をして下さった方が、今日は残念ながら時間が合わなくて来ていただけなかったのですが、国立国会図書館の副館長をやっていた安江明夫さんです。私に言わせれば

戦友みたいな人なのですが、その方が最初におそらく私を推薦して下さいたのじゃないかと思えます。

安江さんが、いつか何かのときに「私は生まれ変わってももう一回図書館員になりたい。それくらい好きなんだ。」とおっしゃっていました。藤野先生のお話を伺っていて、私は60歳になるのですけれども、折り返してももう少しがんばれるかなという感じが、今日はずっと諸先輩の方に元気をいただいているというそういう感じが致しました。

もう少しこの仕事を続けさせていただければありがたいと思っております。

皆様のご協力をぜひお願いいたします。今日は本当にありがとうございます。

〔附記〕推薦者・安江明夫様よりの祝辞

図書館サポートフォーラム賞ご受賞の4人の皆様に、心からのお祝いを申し上げます。藤野先生と末吉さんには、長年に亘り、ご指導、ご厚情を頂いてまいりました。それだけに今回のお二人のご受賞を、大変、嬉しく存じております。お祝いを申し上げますとともに、この機会に、これまでのご指導に対し、また図書館発展のための多大なご尽力に対し、深い感謝を申し上げます。

そして次いで、資料保存器材の木部徹さん、です。

会場には、あるいは木部さんの名前をご存じない方もあるかも知れません。しかし近年、図

書館などで中性紙の保存箱が多用されてきていることは大方をご存知でしょう。そのコンセプトを日本で確立し、また実践に移したのが木部さんです。中性紙保存箱の理論的根拠になっている「段階的保存」や「容器」は木部さんの造語ですし、保存箱に使用する中性ボードの開発・普及に貢献したのも木部さんです。

もう少し一般的に言えば、木部さんは、日本における現代紙資料コンサーベーションの理論を確立した立役者です。これは名論文「表紙は外れたままでよい」「利用のために保存する」等に始まり、「容器に入れる」「治すから防ぐへ」「目で見る「利用のための資料保存」」、さらに「IFLA図書館資料の予防的保存の原則」翻訳等へと続く数多くの著作にも表れています。

その一方で、資料保存の新しい理論を実業化し、図書館等への支援として実践されてきました。それがかつてのCAT (Conservation And Technologies) という名の会社から、現在の(有)資料保存器材へと続いている実業開拓の道筋です。

これらの理論と実践は、日本の図書館等に対する稀有な功績と言えるでしょうし、これだけで十分に高い評価と賞賛に値します。しかし広範囲に亘る木部さんの活躍のなかで、とりわけ重要な功績がもう一つあります。

木部さんは、1980年代に、「CAP 本の保存のための海外ニューズ月報」を一人で編集・発行し、関係者に配布しておりました。無論、ボランティア・ワークです。関係者には有

益かつ刺激的な情報誌として評価され、大変、有り難がられました。

今、それがインターネットの時代に、「ほぼ日刊 資料保存」の名称で継承され、資料保存器材HPから発信されています。紙から電子へ、月刊から日刊へ、個人の努力からチームとしての取組みへと、内容も、手段も、規模も、飛躍的に発展しました。そして「ほぼ日刊 資料保存」は情報ニュース・メディアであるだけでなく、その迅速な紹介、的確な分析、濃い内容のレポートが蓄積されDB化されており、資料保存のエンサイクロペディアの様相も示しています。

私は「資料保存に関わる人で「ほぼ日」を知らない人はモグリじゃないか」と冗談めかして言ったり、「必見・必読サイト」「プロならこれは知っていないければ」と言ったりしています。海外で活躍の日本人文化財保存関係者の間でも評判ですし、海外の日本研究図書館員の間でも重要な情報源として利用されています。

もしこのサイトが英語版でしたら、きっと国際文化財保存修復学会のような国際団体から既に表彰されているのではないのでしょうか。それほどに素晴らしい、インパクトのあるサイトですが、その主導者、編集長が木部さんです。木部さんには、日本の図書館と資料保存の今後の進展のために、引き続き一層、活躍いただきたいと願っております。そのお願いを申し添えて、お祝いの言葉といたします。

木部さん、本日は図書館サポートフォーラム賞のご受賞、本当におめでとうございました。

大森一彦氏（元・東北工業大学図書館）

ご紹介いただきました大森でございます。

私に対する授賞理由のひとつに、何人かの物理学者の書誌を作成したことがあげられておりますが、その真先にあげて下さった（寺田寅彦書誌）についてお話をさせていただきます。

「シャーロックアン」という言葉があります。私は少年時代からの「トラゲーネフトラヤン」であります。そういう言葉は私が勝手に作ったのですが、永年「寺田寅彦」に親しみ、また多くの人が寅彦の人と作品について書いた文章を読んでいますと、寅彦を受容する読者層の構図といったようなものが次第に見えてきます。ごく大雑把な言い方ですが、ひとつは親愛派ないし肯定派、他のひとつはアンチ寺田派ないし批判派といったように読者層はおおむね2分されており、その割合は、9対1あるいは8対2というあたりでしょうか。

前者は、科学者にして芸術家の寺田先生は、一見相容れ難いと思われる科学者の精神と芸術家の精神を一身に体現した稀有の人であるとしてこれを尊ぶ寺田ファンのごとであり、先生のなさることはなんでもありますがたくて立派だと思いいこんでいる、いわば吾が仏尊しーという立場の人達であります。

これに対する批判派は、寺田のことを、科学者のくせに随筆を書く、俳句をひねる、絵を描

く、絵の展覧会を観に行く、トリオを組んでチェロやヴァイオリンを弾く、映画を観に行く、玉を突く……こうした態度を、ディレッタントと称してひどく嫌う。そういう道楽にふける時間があつたら、物理学の研究そのものにもっと専念したらいいではないか—というわけです。さらにこの一派は、寺田の学風を、「小屋掛け物理学」と揶揄し、批判するのです。

このように相対立するふたつの評価の原型は、寺田の生前にすでにあって、寺田先生を悩ませたのですが、それぞれの考え方が時代を超えて継承され現在に至っているようです。これ以外の諸々の受けとめ方もありますが、熱烈親愛派、断固否定派を両極端とするライン上に位置付けることが出来るように思います。

さて、図書館に勤めて、「書誌」という特異な出版物の意義と機能を深く理解し、また数々の優れた人物書誌を見てきた私は、それなら「寺田寅彦」に関する文献を集めた書誌を作り、諸家の様々な見解を記録したらさぞ面白からうと思いました。多様な切り口で検索を試みることに、寺田をめぐる諸見解の系譜をたどることが出来るはずですし、いま述べたような寅彦評価の枠組みがはつきりと分かるからです。長い時間をかけ、よりよい人物書誌のスタイルを求めて試作を何回か重ねた末、先年やつと実現することが出来ました。日外アソシエーツの〈人物書誌大系〉シリーズの「36」『寺田寅彦』がそれです。

余談ですが、実はこの本には、編集制作を担当して下さった比良雅治課長さんと私大森の二

人だけにしか分からないひとつの秘密が隠されているのです。私はこれを黙っていいようかなと思いましたが、こういう愉快なことには言わずにはおれません。それは何かと言いますと、この本の奥付を見ると、(2005年9月26日発行)とあるのですが、実はこの(9月26日)という日付は私の誕生日なのです。1937年生まれ私は、2005年のこの月この日に68歳の誕生日を迎えたのです。これは比良課長さんの、私のライフワーク完成に対する祝意のサインでしょう。私にはこの1行の文字列が宝石の連なりのように輝いて見えるのです。

私の本が出た2005年の秋以降、不思議なことに寺田をテーマとする論文や随筆が数多く発表されるようになりました。タイトルに「寺田寅彦」の4文字をキーワードとして含む論文集や評伝も何冊か出版されました。そこで拙著の与えたインパクトを考えてみたのですが、マイナスの相関は認められる、つまり良くも悪しくもかれらの文業に影響は与えていないのですね。そのことは、かれらの使った「参考文献」を見ることによりそう判断出来ますし、所説の取り上げ方からもそれが分かるのです。

一例をあげてみますと、『図書』(岩波書店)の2009年2月号に「寺田寅彦とフラクタル」という文章が出版しました。冒頭で寅彦の句(粟一粒秋三界を蔵しけり)を引き、これが歳時記によっては(粟一粒秋三界を蔵しけり)となつて指し、没後全集の『第七卷 俳諧および俳諧論』には(粟一粒)として収録されておき、「明らかに誤植である」

と、あたかもご自分の発見であるかのように典拠なしで書いています。しかし、この問題には数編の有力な先行文献があり、すでに詳しく検討されており、そのことは私の本により容易に確かめることが出来るのです。私の本意とするところは、単に私の本を「見なかった」ことを確認したいのではなく、「見なかった」ことによる著者の失考を惜しむことにあります。エッセイにだつてプライオリティがあります。二番煎じの文章に価値はありません。どう考えてもシャーロック・ホームズ研究の水準より劣ります。

私は現役の時も平凡かつ凡庸そのもので、仙台の地にあつて転勤や異動もなく38年間同じ職場で過しました。この間の外部とのつながりといえば、日本書誌索引家協会の会員となつて(1977・97)『書誌索引展望』に数編の論文を発表したこと、日本科学史学会の会員となつて石山洋氏をチーフエディターとする「科学技術史関係年次文献目録」(1972・94)、『科学史研究』連載)の編集のお手伝いをしたこと、それに私立大学図書館協会書誌作成(書誌調査、文献探索)分科会に所属していたこと(1974・)くらいであります。この会は現在、深井人詩氏の主宰する文献探索研究会につながっていますが、2003年春の退職後も、年刊誌『文献探索』を主な発表メディアとして活用し、自分の関心を寄せる何人かの人物の書誌と書誌論を寄稿して来ました。

図書館サポーターフォーラムは、こうした私のいたって地味でささやかな「仕事」を評価さ

れ、表彰して下さいました。これまでの受賞者は、図書館ならびに関連領域のそうそうたる方々ばかりです。私のして来たことが本当に受賞に値するものかどうか自分ではよくわかりませんし、とまどいを禁じえません。ただ、うれしいことに、深井人詩、平井紀子、飯島朋子といったいわば「文献探索派」あるいは「書誌作成派」とでも称すべき方々が、すでにこの賞を受賞しておられることです。私は、尊敬するの方々、と、「書誌」を尊重することにおいて志を共にしていることを喜びとし、その一点にながっていることに深い意義を感じるのです。ありがとうございます。

末吉哲郎氏

(前・図書館サポーターフォーラム代表幹事)

先程表彰委員会で私の件も決まったということですが、委員会が終わった後、私を除いた他の委員の方々でお決めになったのだらうと思われま

す。昨年まで私は、表彰状を渡す方でしたのでとまどっていますが、やはりいただくほうがうれしいです。

私は、経団連に居りました関係で、団体を作るといふことに興味を持っておりまして、経団連在職中あるいは経団連を出てからいろいろ団体作りに他の人より力を注いだかなと思います。大体15団体位、立ち上げた団体がございます。図書館関係の団体がうち7団体程ありま

す。

その中で大森さんがおっしゃいました「書誌索引展望」を出しておりました「日本索引家協会」、これも私も発起人の一人となって立ち上げました。この団体発足のそもそものきっかけは、大森さんの手がけられていた目録が大学の出版局に本人の許可無く書誌目録としてそっくり転用されたということがあります。

索引や書誌に著作権があるとか、無いとかまだ議論されていた時代でした。だいぶ昔です。そういうことでよいのかという問題提起を大森さんご自身からも受けましたし、深井人詩さんも「それはいかん」ということをおっしゃいまして、目録情報あるいは書誌索引作成についての世間一般の理解を深めるということで作られた団体でした。

索引家協会の他、経済文献研究会とか企業史料協議会などがあります。

「経済文献研究会」は経済関係雑誌記事と各種専門図書館で分担し相互協力の形で記事索引誌を刊行、のちに日経新聞の手でJOINTデータベースとして作成広く利用されました。

「企業史料協議会」は企業の社史資料の保存活用、企業博物館の推進を目的とし、ビジネス・アーカイブに初めて取り組んだ団体です。

一番ポピュラーなのは「美図連」（美人図書館員連盟）。IFLA東京の開催前後の設立。

昔は図書館員というと、「あなたどこか体がわるいのですか？」とこういわれたような時代で図書館員が1つの専門職としてきちんと認められていない時代です。30〜40年前はですね。

その中で、海外に留学し、図書館学を学んで、専門職として図書館業務を推進していた女性の方が結構おられた。そこでそれらの方々を先頭にたてて世間に図書館は立派な専門職の職場であるということアピールしようということ、設立されたものでありました。もちろん皆さん美人揃いでした。

「美図連」の名前でパーティーなどの会合の案内を出すと案内状の数より大勢参加者がくるということ、効果絶大でした。

そういつたことで団体の数はいろいろ作りましたが、私としてはこの「図書館サポートフォーラム」がもっとも愛着があります。

私が経団連を辞めて新国立劇場という職場に行っただけです。

そのときに図書館の人が面白がって、オペラハウスですからね、興味を持って100人くらい来られたかな。私としては、一個人が職場を変わる時にただそれだけの話で来られるのは困ると辞退はしたんですが、参会者を中心に各種図書館OBの会を立ち上げるということを条件にしたわけでそれで出来たのがこのフォーラムです。

この会を作って、しかもその中の活動の大きな柱として表彰事業を組込んだということは大変良かったかなと思います。過去10回以上の表彰受賞者はみな立派な業績を受賞盾もあげておられます。

そういうことで私も皆さんを表彰したということでの功績での表彰と思いい、有難くいただきます。大変ありがとうございました。

私、実はきょうが誕生日でございます、しかもなんと喜寿でございます。

そういうことで大変うれしく思います。本当にありがとうございます。

方法としてのトシヨカン

井上 如

図書館は手段か、方法か？

図書館を手段とする立場の人にはいわゆる利用者が多い。ハコに屋根があつて、床があつて、天井もあつて、部屋には書架ばかりいっぱい立っていて、公共のハコであれ、学校のハコであれ、書棚には書物がいっぱい並んでいる。それらは利用者の利用に供するためにそこに並んでいるので、万一お目当ての書物が見つからば、読書室で見ると、借り出して見るなりすることが出来る。自宅が広すぎてその空虚に耐えられない人は、そこに書齋を作って書物を並べる。利用者は自分ひとり。落ち着いた気分がたまらない。たちまち眠気を催してマクラを引き寄せる。マクラが最初に来るのは何も落語ばかりではない。

図書館を手段とする立場の人には、もう一つ別の種類があつて、それは図書館員である。公共施設としてのハコの中にいて書物の番をすることを職業とし、それによって給料を貰つて生活をする。だから生活手段としての図書館である。『生きる』とまでは言えないとしても、死なないでいることくらいは出来る。よくしたもので、この死なないでいるという能力のお蔭で、図書館を手段とする人は、立場の如何を問

わず若年認知症に罹りにくいのか、また罹っても周囲は決してそれに気付かないというメリットがある。図書館員の諸相については、かつて「図書館七不思議」の中で思いつきりボロクソ書いたので今は繰り返さない。

このように図書館に対してその具体、ハコとして形而下的に対応する人々は、心身ともに健全でシワアセかもしれない。そのシワオセはもっぱら図書館をそのコンセプトとして捉える人々に襲い掛かる。方法としてのトシヨカンを採る立場の人々である。コンセプトとしてのトシヨカンは無限に展開可能で、果てしも無い議論の果てに、草臥れ果てて時間を無駄にするだけ損だが、そこは考えようで、無駄に過ぎた時間くらい楽しいことはないの、時間は無駄にするためにあるのだということを悟れば、損して得取れということもある。ついでながらコンセプトとしてのトシヨカンに漢字表記はふさわしくない。カタカナで書くと、トシヨ(リ)カンなどとすぐ展開を思いつく妙味が加わる。方法としてのトシヨカン、あるいは方便としてのトシヨカンの一例をあげると、『情報の蓄積と検索』という機能をトシヨカンにも当てはめた時代があつた。これは information storage

and retrieval を訳したのだが、海の内側の英語の本来はうまいこと言うものだ。トシヨカンにあるのは books であつて information ではない。それを保存しておくのは save であつて storage ではない。床に落ちた丸い消しゴムの行方を確かめ、足の親指と人差し指と(場合によっては中指も動員して)つまんで持ち上げ、手元に取り戻すのが retrieval である。しかしそれじゃ本が売れないから、できるだけ派手に information storage and retrieval などとデコラティブに言うのだ。

それで思い出すのは、まだ学部の学生の頃、トシヨカンを library science と称しているスクールが米国にたくさんあるのを知つて、こんな科学じゃないとクラスのみんなで息巻いた。あとで留学先で博士課程の学生にきいたら彼曰く…学位を取つて就職する時、library science と称したほうが library service よりも給料がいいからサ、と発してすましたものであった。もちろん納得した。英語なんて、使い方を会得するのでなくちゃ、文章が読めたって何の役にも立ちやしない、かえつてナントカバカになるだけだと、その時ただちに悟つていればまだリッパだったのだが……。

トシヨカンをコンセプトとして捉えた時厄介なのは、トシヨカンの根幹にも関わる書物のヨミとカキだ。意味の上では、ヨムほうは良い意味に使われる。(研究には本をよむことが大切である。しかし、その前に、さらにそれと同時に、「世界という大きな本をよむこと」が大切であろう) (桑原武夫/デカルト)といった具

合だ。もつともこれは桑原やデカルトだからいいが、我々がそこらへんの集まりでこれを言ったら最期、以後誰も相手にしてくれなくなる。

一方、カクほうにはロクな意味がない。頭を搔いたり、いびきを搔いたり、背中を搔いたり、汗を搔いたり、裏を搔いたり、ペソを搔いたり、寝首を搔いたり、恥を搔いたり。およそろくな意味がない。そして駕籠を昇いたり、決め手を欠いたりといった例外はあるにしても、「搔く」という漢字表記がなんと幅広くあてはまることか。そして広辞苑のかく「書く」の項目の冒頭には「搔く」と同源。先のとがったもので物の面を引っかく／＼とあり、さらに続けて「描く」「画く」とも書く／＼とある。まことにさもありなんである。それにしても、「先のとがったもので物の面を引っかく」とは、ズバリ、言い得て妙だ。「描く」や「画く」を、LSFの不世出の初代代表幹事、ベレー帽とパイプがよく似合う末吉哲郎画伯の「描く」ばかりでなく、本稿のように、絵空事を画策するのも「書く」と同列に扱ってくりやこりやもう言うことは無い。

方法としてのトショカンの中心となる機能は、蓄積と検索や、読みと書きなんかじゃなく、collecting + missingである。しかしその前言すら一言も言わないうちに、紙数が尽きそうになってきた。もし書けば今の100倍は紙数が要るだろう。改めて今までこの「ワープロの画面を指の先で引つかいた」の読み返してみると、カタカナ標記が多い。そうなったのは年寄館とはまた別のワケがあるのでそれだけヒ

トコト。

鎌倉市内の、拙宅からあまり遠くない山の中に、東大医学部出身、京都大学名誉教授で、生殖生理学、大脳生理学、食脳学がご専門の大島清先生の閑静な山荘がある。もちろん、稀代のウオーカーで、今たしかオントシ83歳のはずだが、ご自宅の近所を中心に毎日15キロ以上歩いておられるとのこと。ウオーキング関係でも、「脳は歩いて鍛えなさい」を始め、4冊が私の手元にある。その他、著書多数どころか、著書無数と言うべき達人。その中で筆者の愛読書は「温泉と駄ジャレと手料理が脳に効く」で、「脳は歩いて鍛えなさい」の方は、これでもウオーカーの端くれを自負している筆者にとつては話がちょっとウマ過ぎて、率直のところ、いささか眉唾でもある。手料理の方は、長距離ウオーキングの場合日常茶飯事で、これも先生の好著「おとこ飯」で、かんたんな、手抜き料理をだいぶ教わった。駄ジャレが脳に効くというほうは、真偽の程はともかく、カタカナ標記を漢字と組み合わせると文章が俄然引き立つ点が教訓的である。若い頃から駄ジャレ夫人の恋人を以ってみずから任じてきた筆者にとつては「学而時習之 不亦説乎」というわけだ。



詩人津村信夫の肖像

植村 達男

四季派の詩人津村信夫の名をご存知であろうか。松本清張や太宰治と同様、今年が丁度生誕100年にあたる。近代文学関係の事典には必ず登場する詩人であるが、一般的にはあまり知られていない詩人かも知れない。この津村信夫、あとで詳しく述べるが、戦前の一時期東京海上の社員として勤務していたことがある。私が勤務していた住友海上（現三井住友海上）と同業界の会社であり、とりわけ関心をもった。

1983年（昭和58年）、東京・世田谷の小さな出版社麥書房から『頬笑みよ返れ 追憶の津村信夫』という本が出版された。この本は、戦時中の1944年に病没した詩人津村信夫の追悼文集である。この本は、津村信夫の死後計画されたものの印刷所が空襲による強制移転となったため未発行に終わる。幸いにもゲラ刷りが残されたため、40年近い歳月の後に陽の目を見たのであった。この仕事に取り組んだ麥書房の代表者が堀内達夫である。1974年（昭和49）に角川書店から刊行された『津村信夫全集』（全三巻）の編集委員の一人であった。さて、その『頬笑みよ返れ 追憶の津村信夫』という本であるが、限定800部という少数数の出版。そのため、古書価格は高値を呼んでいる。

アマゾンでの古書価格は10,000円という価格が付いている。ちなみに、発行されたときの定価は2,300円だった。この古書価格は、津村信夫の詩人としての人気のバロメーターとも見ても良い。私は、発行元の麥書房の近くに住んでいたもので、直接購入した。多少安く手に入れたことを記憶している。

先日、世田谷区立梅が丘図書館の道路を隔てた南側にある麥書房のあった場所（代田4丁目37-12）に行ってみた。建物は当時のものと思われたが、堀内達夫自身も物故者であり、住む人は変わっていたようだ。津村信夫が亡くなったから60年、その追悼文集『頬笑みよ返れ 追憶の津村信夫』が出版されてからでも四半世紀の歳月が経過している。

『頬笑みよ返れ 追憶の津村信夫』の冒頭には、室生犀星の「序にかへて 小説の作法」があり、以下室生犀星の弔辞、詩人丸山薫の弔詩「君去ったあと」、円覚寺管長朝比奈宗源師の香語が続く。詩人津村信夫の死に対して、多数の詩人・文学者が追悼の文章を寄せている。中里恒子、与田準一、竹中郁、中河与一、田中冬二、深沢紅子、神保光太郎、堀辰雄、太宰治、保田與重郎、三好達治……。津村信夫の父で

ある津村秀松の神戸高商（現神戸大学）教授時代の同僚内池廉吉や桑原武夫（妻の父が神戸高商で津村秀松の講義を受けたという縁もある）も追悼文を寄せている。この時期、津村信夫の父は亡くなっていたが、母（津村久子）は存命で追悼文を寄せている。また、津村信夫の兄である津村秀夫（朝日新聞勤務、後に映画評論家。評論の文末に「Q」と表示することで知られていた）は、追悼文とともに津村信夫の年譜を担当している。津村信夫の妻津村昌子（1936年に結婚）の追悼文の中に、「会社と文筆との両立」に悩む津村信夫の心境を表す父宛の手紙（1938年春）の一部が紹介されている。この年の春、津村信夫は、勤務していた東京海上を辞めた。東京海上時代の同僚で、津村信夫の莫逆（ばくぎやく）の友といわれたのが坂本幸一。以下は、その坂本幸一による「津村さんと私」からの引用。

津村さんと私の交友は学窓を出られて丸ノ内の東京海上に入社された十餘年前に始まり、初対面のそのときから心の友として堅く結ばれて参りました。生ひ立ちも環境もまるで異なった二人が生涯の友として相寄ったことを思ひますとき、真の友情とは世間で謂ふ生活環境等を絶対に超越したものである事を沁々と感ぜずにはゐられません。

（中略）

詩人としての丸の内での生活は一面道草のやうに感じられますがこの哀しい三年有半の丸の内時代こそ津村さんにとって人間試験の機会であ

り津村さんの詩魂に肉づけをした大いなる時代であったのだと私は信じて居ります。

(中略)

昼休みがくるとどちらからともなく誘って会社の外に出て、雑沓する東京駅の三等待合室のベンチに腰を下し田舎めく旅人の姿に何か魂の虚妄を郷愁し、京橋裏のミルクホールに紛れ入つては藤村や牧水を語り、プーシユキン、ゴリを論じ又ドウデーの『風車小屋だより』等を物語り時の果てるのを忘れる程でした。

この坂本幸一は、インシュアランス誌(1981年1月1日)に「遠い空」というタイトルの旧友津村信夫に関する小文を寄稿している。そこで坂本幸一は、津村信夫の作品に関して、実に貴重な証言をしている。ここに、その一部を紹介しておこう。

津村信夫に「牛のこと」という作品がある。以下に引用するのは、この詩の前半の部分である。

大きな建物のなかで

靴で踏まれたり

鼻拭きにされた紙きれは

いつのまにか

うづたかく積まれて

その車を曳いてかへるのが

その従順な動物の役目だと

私はあとになって聞かされた

.....

この詩で「大きな建物」というのは丸の内にあった東京海上ビル。「従順な動物」とされているのは、そのビルの中庭に繋がれていた「牛」のことを指す。このことを指摘したが坂本幸一である。当時の丸の内には、ゴミを運搬するための車を牽引するための牛の姿が見られた。まさに、同時代の証言である。この詩は津村信夫が東京海上に入社した年の12月に発行された「四季」に掲載されている。坂本幸一は、「会社員生活の味気なさを初めてみにしみて感じ出した頃の、彼自身の心象風景を「牛」・・・に託して、サラリーマンの心奥を語ったものとして、希少な一編と思う」と記述している。

ここで話題を転じよう。永らくの間、朝日新聞第一面に詩人大岡信が担当したコラム「折々のうた」が掲載されていた。津村信夫の作品が、この「折々のうた」でとりあげられたことがある。1983年(昭和58年)6月2日付に「小扇」という極めて短い詩が紹介され、大岡信によりコメントが付されている。そのコメントの最後の部分は「信州の夏の叙情小景。淡彩の美が取り柄である」と結ばれていた。

指呼すれば、国境はひとすじの白い流れ、

高原を走る夏期電車の窓で、

貴女(あなた)は小さな扇をひらいた。

「小扇」は、『愛する神のうた』(1935

年、四季社)の冒頭に所収。この詩集は津村信夫の処女出版である。装幀を一水会会員の深沢

紅子が受け持った。社会人としてスタートを切ったのはこの年の4月。同じ年の11月30日が『愛する神のうた』の発行日となっている。この詩に出て来る「貴女」という女性の名は特定できている。ミルクイウエイとも呼ばれた少女は、津村信夫の父津村秀松の職場(官立神戸高商)の同僚である内池廉吉の娘である。内池は、東京・神戸の高等商業学校の教授を兼務していたが、後に兼務が外れ東京商科大学(現一橋大学)の専任教授となる。内池廉吉は、先に述べたように「頬笑みよ返れ 追憶の津村信夫」への寄稿者の一人である。

本題とは外れるが、この内池廉吉が神戸高商時代におこなった講義が、出光興産の創業者である出光佐三(1909年神戸高商卒)に多大な影響を与えている。出光佐三は、「人間尊重」を基本精神とした独自の経営理念をもつ経営者として広く知られており、自己の経営について社内外で語ることが多く、おびただしい数の講演録等が残されている。その中に、内池廉吉の言葉が繰り返し出て来ている。また、戦後になって弟である出光計助とともに内池廉吉を訪ねたりもしている(出光佐三『人間尊重50年』1963年、春秋社)。

ここで津村信夫の生涯を簡単に辿ってみよう。津村信夫は、1909年(明治42年)1月5日、法学博士津村秀松・久子夫妻の次男として神戸市葺合区熊内橋通に生まれた。父は1866年(明治9年)、和歌山県日高郡御坊町(現御坊市)の造酒屋和佐屋佐吉の次男として生れ、信夫誕生当時、神戸高等商業学校(現神

戸大学の前身)の教授であった。母久子の父は小山健三。小山健三は東京高商校長、貴族院議員、三十四銀行(後の三和銀行)頭取等を勤めた。津村信夫は、このような富裕で教養豊かな家庭環境に育つ。姉、兄がいる三人兄弟だった。

1915年(大正4年)4月、津村信夫は雲中尋常高等小学校入学する。1度受験に失敗、小学校卒業の翌年2回目の受験で1922年(大正11年)4月、兵庫県立神戸第一中学校(神戸一中、現神戸高校)に入学する。二学年上に、兄秀夫が在籍していた。最近、ブームとなっている白洲次郎やその同期生である吉川幸次郎(中国文学)は、津村信夫が入学した年の3月に神戸一中を卒業している。また、神戸一中を卒業した同期にはソニーの創業者井深大や俳優の山村聰がいた。

1927年(昭和2年)4月、津村信夫は慶應義塾大学経済学部予科に入学した。小学校時代からテニス、相撲、ランニングを愛し、中学時代は陸上競技部の選手であったが、小学上級の頃にキリスト教教会に通うこともあり、中学卒業間近の頃、家族に隠して詩や短歌を作りはじめる。予科入学の年の7月頃、肋膜炎を病んで2年間休学した。この休学中、「アララギ」を購読、自分も短歌を読むようになる。津村信夫が詩の世界とふれあうのは兄津村秀夫の影響がある。大学予科時代の1929年(昭和4年)、東北帝大ドイツ文学科で学んでいた兄の勧めで詩誌「地上楽園」同人に参加した。その前年、生涯の師となる室生犀星を訪ね、以後交

流を深める。丸山薫、堀辰雄、三好達治等諸先輩との出会いも学生時代のことであった。津村信夫は、詩の世界にのめり込み、経済学には全く興味がなくなったようである。

既に述べたように、津村信夫は中学入試に1度失敗している。慶應・予科時代の2年の休学を含め通常の学齢より3年遅れて、1935年(昭和10年)3月に慶應義塾大学経済学部を卒業した。卒業論文は、小泉信三教授のもとイギリスの経済学者リカードをテーマにしたものだった。大学同期に、後に住友海上の常務をつとめた上原一男がいた。二度の受験の失敗(現信州大学の前身である旧制松本高校の受験にも失敗)、病気による休学。これらは、津村信夫の内面深くに影を落としていたに違いない。津村信夫の作品のもつ優しき、弱々しさは、その「育ち」とも深い関係がある。しかし、受験の失敗、病気療養による煩悶や苦しみが、思いやりの深さや暖かさに繋がるともいえよう。また、学者の家庭という恵まれた環境からくる品格。これも津村信夫の作品の特徴といえよう。慶應義塾大学経済学部を卒業すると、津村信夫は、父の勧め(秀夫によると「命令」)で東京海上に入社した。高等商業学校(後の東京高商)出身であり神戸高商で経済学を講じた学者として、また実業家(父津村秀松は、後の日立造船の前身会社である大阪鉄工所社長をつとめている)として強い人脈により、東京海上への入社が可能になったようだ。当時の東京海上専務である各務謙吉は高等商業学校の卒業生、1939年に東京海上社長となる鈴木祥枝(すず

き・さかえ)は、神戸高商第一期生である。同じく神戸高商第一期生で東京高商専攻部で学び、学会から東京海上に転じた堀内泰吉も津村秀松の教え子であった。津村信夫と時代を同じく東京海上で働いた人々の中の何人かは「コネ入社」というコトバ(当時、この用語は存在しない?)は、使用しなかったが、「××さんの線での入社であろう」と推測していた。もっとも、この時代の就職試験というものは、今よりずっと「密室的要素」に支配されていたのであろう。

津村信夫は、表面的には真面目に仕事をしてきたようだ。船舶保険のフリート表を作るのが当初与えられた仕事だったようだ。大学で経済学を学んだ若者にとって面白い仕事とはいえないだろう。しかし、将来船舶保険関係の仕事に身につけ深めていく社員にとっては、基礎的な業務であり、簡単に「つまらない仕事」とは言い切れない。そもそも、給料を貰って仕事をしているのだから、仕事に面白いか否かの次元の問題ではない。これは、古くて新しい問題である。兄秀夫によると、津村信夫は、明治生命に阿部章蔵を訪ね、「胸中の煩悶を訴えていたら「面白い」とも書いている(津村秀夫「遠くの島から来た手紙」1984年、勁草書房)。阿部章蔵とは、作家水上瀧太郎の本名。津村信夫の慶應の先輩にあたり、また恩師小泉信三の芝三田台町小学校で同級生だったという旧友にあたる。

本稿を書くにあたり『頬笑みよ返れ 追憶の津村信夫』を久しぶりに取り出してみて、太宰

治が「郷愁」の表題で追悼文を書いていることを再発見した。津村信夫と太宰治。ミスマッチな組み合わせの感がする。太宰の文章も、あまり印象に残る文章ではない。しかし、「津村信夫は、私と同じくらゐる年配でもあり、その他にも理由はあったが、とにかく私には非常な近親性を感じさせた。津村信夫と知合つてから、十年にもなるが、いつ逢つても笑つてゐた」というあたりは、親しみがこもつたものであり、結びに「私は中原中也も立原道造も格別好きでなかつたが、津村だけは好きであつた」とあり、二人の親密の度合いを推し量ることができ

る。室生犀星の弟子で、入社した年に詩集を出した詩人。太宰治は友人。そんな人物が戦前の東京海上火災にいた。このことは損害保険業界はもとより東京海上火災でもあまり知られていないに違いない。このような動機から、津村信夫を「追っかけて」30年の歳月が経過した。その間、坂本幸一と出会う機会も持てた。津村が僅か3年余を過ごした東京海上火災も統合により社名を変えてしまつてゐる。そして、今年には津村信夫の生誕100年に当たる年だ。そこで、これまでの津村信夫情報を纏めてみようと思ひついたので。



かぎろひ紀行―奈良県大宇陀の地へ―

惠光院 白

数年前の二二月、ネットサーフィンの最中、酔狂にも「かぎろひ」をフト検索してみた。長短の蘊蓄どもを読まされた後、なんと、奈良県は榛原（ハイバラ）の南、大宇陀町（現在は平成期合併で宇陀市大宇陀地区になっている）で、万葉集の故事に倣い古歌の詠われた旧暦のその日に当って、現在の大海日間近の一日を、観光行事の一つ、「かぎろひ」の祭りとしている事が分かった。同町役場の観光課に電話でいろいろお尋ねし、案内チラシを送ってもらい、年末の仕事を幾つも片付けて、その前々日に出かけることにした。

当日、大宇陀町での未明、暗い田舎道を同宿の人たちと連れ立ってかぎろひの丘・万葉公園という会場に向かう。既に会場では篝火が点され、大きな焚き火に多勢の人が暖をとついで、イベント用のテントが並び、サービスの葛湯で体を温める。程なく町長さんの挨拶、観光会長の歓迎の言葉が続き、東屋を囲んで「万葉集」からの古典和歌をベースにした典雅な小オペラが、管弦の響きと現代風の鳴り物とで、衣裳、語り、踊りとで、上演された。暗闇が何やら厳かな神事、儀式舞踊を想わせ、心もいささか飛鳥朝の人たちの趣である。大焚き火に暖ま

りながら観光会長さんを囲んで、暫し古典和歌の話などを伺う。会長さんのお話しとパンフレットからの引用によると、この大宇陀町一帯は、古代飛鳥のころ、国・朝廷のお狩場、牧場があり、馬の産出地だったとのこと。冬のある日、軽皇子（後の文武天皇）が滞在した折、たまたま或る早朝、東の空に美しくも不思議な夜明けが現象し、随行した宮廷歌人・柿本人麻呂が、これを吉兆として寿ぎ、

「ひむがしの 野にかぎろひの 立つみえて
かへりみすれば 月かたぶきぬ」

の一首をもつて讚美、皇子に献じたという故事があった。以後、この和歌は歌聖・人麻呂の秀歌として語り継がれることになった。それが旧暦のこの日、この朝だったわけ（天文学的に逆算して導き出したという）で、それが発端となつてのお祭りとなり、大分前から大宇陀地区の観光イベントとして開催されているという、いきさつであった。

待っていてもなかなか夜は明けなかったが、ようやく時刻は来ても残念ながら、その朝は東の山の端の方角、スカイラインは曇りで、太陽

らしきものは出たが、寒い冬空が一带を支配し、「かぎろひ」姫は、ご来臨あそばされなかった。月が西天にあつたか否も記憶にない。これまでのこの素朴で典雅な文化的な催しは約三〇回の歴史を繋いできたが、「かぎろひ」とそれらしき朝を迎えたのは、二、三回で、他に別の日ながら数度現象が観測された、という実績とのこと。当日のパンフレットや観光協会会長さんの話では、その現象する早朝の天候が、零下二、三度、前日は雨で地面がやや湿つていて、それ故大気は澄み、しかも快晴、無風という舞台が用意されていて、はじめて「かぎろひ」という天象が起きるのだそうである。

……時は半世紀遡る、多分昭和三一、二（一九五五、五六）年の一月か二月の相当寒い早朝、筆者は名前さえ知らない、それを視たのである、いやおそらく天の演出は、その朝、その時をピンポイントで選んだに違いない。その高台の直ぐ下の、街路灯もほとんど無い家々の門や新聞受けに朝刊を配達しながら、ふと空を見上げると、暗闇の町々と漆黒の天空から、絹の肌触りのような濃い紫色が空を覆い始めていた。徐々にその紫は赤味を帯びてきて、またまた気がつくとも目にも鮮やかな深い紺色が満天を変えて広がり、青年期の槍ヶ岳・穂高登山時、大快晴下でしか記憶にないような、恐ろしいほどの紺碧の蒼空に代わっていた。続いて、その高台の上に急いで登った頃、刻々と眩い黄金色になつて展開し、同じく絹の感触にしか例えられない澄んだ黄色の天空から、燃えたぎる太陽が勝利者のように登場してきた。その後は、い

つもの澄んだ空色の朝が何事もなかったように始まった。時の長さは記憶にない、刻一刻としか言いがたない、五分だったろうか、一分はなかったかと思う。天と太陽との雄弁で荘厳な一時の無言劇、清閑な彩りたちの豊饒な連舞であった。通例の朝焼けとは断じて違う。筆者は当時、絵を描く喜びを体得しつつあり、しっかりと目に留めようと咄嗟に決めたために、この天空と色たちによる沈黙の祝祭を、半世紀以上の後にも鮮明に思い出せるのである。

さて、その名はのちに知ることになる「かぎろひ」であった。筆者にはそれが「万葉集」を語源とするような天空の現象であることも、「かぎろひ」という言葉も、未だ知らなかった。読者はお見通しながら、言葉を知ったのはずっと後の国語・古文の授業中であったが、その時ですらその言葉と筆者の見た現象である事とは、結びつかないまま、永い年月が過ぎていった次第である……。

お地元のご婦人連による名産の品々や軽食の店が並ぶ中、熱いお汁粉で満足し、残念を吹っ切り、一人近くを散策することにした。丘のすぐ下、田圃のなか、東側に人麻呂公園が広く整備され、更にその東のなだらかな丘には、天然温泉の健康ランドが真新しく造られていて、余裕があれば湯船に浸りたかっと思ふ。宇陀地区には他に幾つかの重文の建築物や薬草園が点在している。案内され、奈良、伊勢、吉野を繋ぐ街道として町の中心道路には道の駅も設置され、実に古代をイメージするに相応しい鄙びた里山、丘陵であった。帰宅して、古代史とを繕

き、地図で確認すると、何と彼の地・大宇陀は古代有数の大事件、「壬申の乱」(六七二年)の、勃発第一頁の場所であった。吉野を逃れ、伊勢に急行する大海人皇子一行が、初めて食事を摂り、馬を再調達したのがこの大宇陀の地であった。何も知らぬままの年月であった。そう言えば、戦後の大ヒューマンスト・手塚治虫の名著『火の鳥』の一節にも、壬申の乱のこの旅程からのエピソードが活写されていた。また筆者、帰路の途中で参拝した近鉄榛原駅の南東側に鎮座する墨坂神社(この地と長野県須坂市に二社、計三社しかない、珍しい社名)も、壬申の乱の最中、一時劣勢に立たされた大海人皇子軍の支隊が戦勝を祈願し、再出陣をした故地だったと記されていた。皇子の本軍は伊勢・桑名で大陣容を整え、不破の関(ご存じ、関ヶ原の古称)を抜き、琵琶湖畔・勢多(瀬田)での大勝の後、皇子は天武天皇として即位したという、史実が続く。

ところで先の「かぎろひ」を筆者が見とどけた高台とは、文京区は本郷、文豪・森鷗外翁旧宅跡の、現文京区立森鷗外記念館の場所である。翁が仮にご存命であったならば、その早暁の天空の宴については是非にも、ご感興を伺いたるところであった。早朝バイトという仕事での、他の学友に比べ報われることの少なかった時代以後、名前さえ知らぬあの空の「かぎろひ」は我が心の永き宝物となっていた。

時は十年下り、小生にも愚息が誕生し、先ずは名前が必要となったものの、右の事とは全く脈絡も、想いもつかず、何と「祥光」と命名

していたのである。今回この拙文を草して初めて気がつき、偶然の親馬鹿を知らされた次第。その後の彼の成長は語らぬこそ花であろうか。文末に際して駄製の一首をお許し頂きたい。

かつて吾れ

早朝バイトで

仰ぎし宙(ソラ)

アレ「かぎろひ」と

謂えるとぞ

煌(マバ)ゆき

これにて筆者の「かぎろひ」への想いは、半世紀後に大いに納得が叶い、何やら1/2目出度くも起承転結におさまった事になる。願わくばもう一度「かぎろひ」姫を拝し得て、然る後に人生のエンディングを全うしたいものである。静閑にして、煌(きら)やかな日々のそれを。

図書館のある風景（その三）

近江 哲史

I 地域で考える

この頃モノを言いたくすることが多い。余計なことを言って響感を買うこともあるが、こゝで言っておかなければと社会的使命を感じてしゃべることもある。四月十四日L S Fの二〇〇九年度総会に出席したら、今年度計画書案の「その他」の項に「社会に対して図書館の意義を提言する活動」を実施しましょう、という文言があった。社会ってナンだ？ 図書館の意義ってナンだ？ どうも抽象的に過ぎる。そこで早速ムシが起きて一言。この頃全国の自治体では図書館予算を減らすことばかりが横行している。これは議員連中が図書館の意義も認識せず、市の予算が足りなければここを減らせば簡単だ、とやってしまうのが多いらしい。第一、議員で、ともに図書館を使った経験のある人は極めて少ない。だから、こういう連中を相手にしつかりアピールしなければ図書館予算の増額（あるいは減額の阻止）は見込まれないのである。「出版クラブだより」（財団法人日本出版クラブ刊 二〇〇九年四月一日号）にこういう提言があった。長くなるが、引用させて頂く。

（上略）いまにはじまったことではないが緊縮財政のなかで国や自治体は図書・図書館への予算措置に熱心ではない。日本の図書館の数や内容の充実は国際的に低い水準だ。

▽〇七年からの新五カ年計画の学校図書館図書購入費一〇〇億円の地方交付税措置も約三〇%しか使われていない。むかしから図書館は選挙票に結びつかないと思っているので政治家は関心が低いのである。図書館側も利用者側も低い図書の購入費に対してあまり文句をいわないからへらされてきたのが現実だ。

▽そこでひとつ提案である。国会議員選挙、県・市町村の選挙時に立候補者に図書館について質問するのはどうだろう。図書館関係者でもいいし、出版関係者は図書館充実のために積極的に地域住民として質問することは当然の権利である。

▽まずは、議員の図書館への関心を高めることが大事だ。質問の内容はなんでもよい。そして、わが町の図書館の現状（ほとんどの図書館には問題山積）を知ってもらう。選挙時だから立候補者は何らかの対応をせざるをえない。立候補者が公約する場合もあるだろうが、対応をしないこともあるだろうが、とにかく質問する

ことに意味がある。（後略）

というわけで、この提言は私の言いたいことに近い。皆さん、何とかこれに類する具体的な方法を考えませんか。私は以下のような質問項目を考えた。まだ実行していないのだが、この問いかけが適切であるかどうか、まず本誌読者諸賢のご批判を乞いたい。

一 あなたは当市（選挙の状況に応じて変更）の市立図書館をふだん利用していますか。

二 あなたは当市の市立図書館のおおよその蔵書数、おおよその年間資料費をご存知ですか。

三 あなたは当市行政の運営または議会活動において、図書館を使うと便利だと考えたことがありますか。

四 あなたは市民の生涯学習活動の促進に、図書館の存在が重要であると思いますか。

五 あなたは当市の資料費、利用者数が年々増加しているか、減少しつつあるかご存知ですか。

首都圏などの諸県下の市は、今、旧市民と新市民の間の葛藤が見られるのではないか。私の

住んでいる千葉県N市などはその典型的なもので、市になった時は人口五万くらいだったが、それから二十年ほどたった今は十六万に至らんとしている。東京のベッドタウンとしてドンドン他から人が流入してきたのである。ここで従来から住んでいる地元の人、つまり旧市民さんたちは何をしているかという、昔からの土地をボチボチと程よい頃に手放して、その金でマンションあるいはアパートを建て（すべては税金対策）、自分は親の代から引き継いだその金で左団扇である。いや、今は「左冷房」か。何億の金があつと言う間にできる。その挙句、見ているとお決まりの遺産相続をめぐって骨肉の争いをやっている。必ずといっていいくらいに不幸な家族ができあがっていくのである。「ああ、あの金を図書館に寄付してくれればなあ」と私は思う。ところが、その気配はまったくない。この人々は図書館などに何の関心もない。

税法の問題もあるだろう。私もお金があまっていたら図書館に寄付したいが、そう簡単にはいかないようだ。アメリカのカネギーさんなんか二千余館だったかの図書館を寄付している。私はしても地元のただ一館ぐらいの気持ちしかないが、と冗談にも考えるが、法制的に案外困難なようである。受け皿がまず要るのだろう。「N市立図書館充実基金」とするのか、私たちのNPOが受け皿になって「NPO法人ながれやま葉 図書館充実基金」がいいのだろうか。もともと、N市にも日本にも、まだまだ個人として寄付を行なう慣習がないのでなかなか

困難ではあろうが、ひよつとして突如大金持ちが現れて、寄付したいが、と言って来て下さることが絶対ないことでもないだろう。その日のために準備、対策だけは講じておきたいのだが。

II 「お客さまは？」

親しかったもの書きの知人が亡くなって、その夫人から故人が関わっていた同人雑誌を今も送って頂く。「山脈」一二二号（二〇〇七年七月）であるが、その中に、ある町立図書館の臨時職員をしているNさんという人の詩が出ていた。それがすごい。

新しい図書館は斎場の隣にある

盗難防止用のゲートの警報機が

無人でも鳴ることがある

あわてて駆け寄っても

人間の姿はどこにも見当たらない

（中略）

（ああ今日も柩を抜け出して

本を借りに来たんだな）

（中略）

読み終わらなくても

火葬場に行く前に

返却ポストにこっそり返しておいてね

かすかな線香の匂いのする本に

きつと気づくから・・・

というものである。

この町の人々は本当に図書館好き、読書好きの人が多いらしい。この詩によると、亡くなってからも通夜を終えて葬儀を迎えるまでの半日が退屈でたまらないらしく、夜中こっそり柩の中で本を読みふけているらしいのだ。そういう便があるよ（つまり、隣が図書館で、無料で本が借りられるよ、という情報）と死人たちの口コミで広まったのか、という詩の中の言葉に、笑ってしまった。この詩の題が「お客さまは？」というのである。

III シニア向けのレファレンス事業

産経新聞社刊の『正論』という月刊誌がある。この巻末に、読者が聞いて読者が答えるという投稿同士で成り立っているおもしろい質問応答欄がある。この雑誌は保守派の人々というか、シニア層が読者に多いようなので、勢いこの欄は戦前からの記憶を確かめ合うということになっている。私はレファレンサーというつもりで、時々調べごとをしては、「回答者」になっている。こういうものは若い司書さんたちとちよつと困るのではないか、というものが多。私が過去に投稿し、載せられたものには次のようなものがある。

○四年二月号 山下大将の女子教育論

○四年十二月号 朝鮮鉄道唱歌

○五年一月号 新国民歌

○五年四月号 米兵の挙手の礼

○六年五月号 陸軍戸山学校

○七年五月号 白頭山節

○九年三月号 琵琶湖哀歌

ご覧のように、ほとんどが戦前・戦中の話題に関わるものである。司書の方々はもちろん時代に問わず文献を調べて結果を出しているだろうが、若い司書さんには難しいのではないかと、同情してしまう。特に文献では表現しにくい姿形に関するものは経験のない話で調べ難かるう。米兵の挙手の礼というのは、ジェンキンスさんが日本に来た時、横田基地であったか、背広姿なのに挙手の礼をやって、我々はまことに異様な印象を受けた一件である。日本人の認識では挙手の礼というのは、軍人などが制服制帽の時のみ行なう形であって、帽子もかぶっていない人間が挙手の礼をしているこの頃のテレビなど見ていると、私は気がおかしくなりそうになる。

同様なわけで、たぶん誰もが回答に困るだろうと思われるのは「万歳三唱」のルールである。テレビでも、選挙があると必ずその当選者を囲んで支援者が万歳をやっているのだが、この頃は当選した本人と一緒に万歳しているのはあきれかえる。あれは支援者が当選者を祝ってあげるの、当選者はその都度、つまり三度頭を下げなければならない。

それと万歳の手のひらの向きが肝要である。この頃のバカどもは両掌を人に見えるように前方に向けて両手を上げているが、これは「降参」である。正しい万歳は両掌が向かい合うよ

うに上げなければならない。（『SAPIO』誌 二〇〇九年二・一／二・一八号 のマンガ六九ページ参照）私の常識ではそれが正しいと確信を持っているが、しかしこれが本当か文献で調べようとするとなかなか難しい。戦前は絶対にもうこのことはなかったのだが、最近は大半の人々が万歳三唱の姿として「降参三唱」をやっている。情けない図である。

その他、私は図書館でちらちら他人のレファレンスの様子を耳にするが、シニアの人々の質問は確かに手ごわい。だから、シニア向けのレファレンサーはシニアが対応した方がいいのではないかと、思っている。ここにも図書館ボランティアが活動してもいいように考えている。

IV 大学図書館を歩く

今春、私事で関西に出かけたが、時間があつたので京大附属図書館に入ってみた。五十余年の前、私もこのあたりをウロウロしていたはずなのだが、風景はまったく変わってしまった。浦島太郎のごとくである。今、当大学の中には図書館・図書室などが六十前後あるようだ。（かつてハーバード大学を見学した時、ここは百個の図書館がありまして聞いて腰を抜かしたのだが、最近では日本の諸大学でもずいぶん数は増えたようだ。）そこで全学内図書館・図書室などをたばねるため「図書館機構」というものが平成十七年に発足したという。図書館機構長が附属図書館長を兼ねている由である。

図書館機構報である『静脩（せいしゅう）』というパンフレットを貰って読むと、面白い記事があった。その二三のものを紹介しておこう。○九年一月号の薬学研究科金子教授という方のエッセイである。「図書館なんて、もういない？」の頭にこう書いてある。

インターネットという言葉も存在しなかった私が院生の頃は、研究をするためには薬学部の図書室に日々通って、新着雑誌や高い天井まで届くほど整然と並べられた学術雑誌のバックナンバーを一生懸命読みあさり複写しては研究情報を得ようとしていた。それが今ではウェブやメールを介していくらでも新着情報や電子ジャーナルが読めるようになって、図書室に院生以上の姿を見ることはほとんどなくなってしまった。（かく言う私も学部の図書委員長でありながら、図書室には滅多に行かなくなつた）。理系の多数を占める実験科学領域の人々は、図書館というものが存在しなくても自分たちの教育や研究に支障がないので、まるで関心を失ってしまったようにも見える。

なるほど。でもこれはどこでも言えることなのだろう。図書館の将来を考える一つの方向性を示しているのではないかと。

一方では別のニュースが出ていた。「学習室24」がオープンしたという。附属図書館の二十四時間利用可能な学習室ができ、九十一席の自学自習のできる「自学24」というスペースと、飲食・談話のできる三十七席の「なごみ」とい

うスペースができたというのである。国立総合大学としては初めての試みとか。なかなかうらやましい限りである。

もう一つ、三月号に講演会の記事があり、お茶の水女子大学の茂出木理子（もできりこ）さんという人の話で、「幸せな図書館のつくりかた」というものである。幸せな図書館ってなんだ、というと①利用者にとって、②働く人々にとって、そして、これが面白いのだが、③図書館にとって、というのが加わる。図書館を擬人化したときに図書館が喜ぶ・満足しているという意味で幸せであるということ。よく考えてみると、これはいいことだし、図書館関係者（人）が考えてやらなければならぬことであるに違いない。新しい視点を教えられたと思った。

京都、新緑の美しい季節だった。



いわきの図書館・博物館を巡る旅

門倉百合子

二〇〇九年三月七日土曜日朝八時五十分、東京駅八重洲南口バスターミナル八番に集合した八人の図書館探検メンバーは、いわき行ききのバスに乗り込んで九時三十分の定刻に出発しました。昨日の土砂降りがうそのような好天に恵まれ、一路常磐道を北へ走ります。利根川を越え関東平野をまっしぐら、おしゃべりに興じているうちに、十二時過ぎ、いわき市到着。いわき在住で長年いわきの図書館振興に尽力しているTさんが迎えに来てくださっていて、すぐに昼食を予約した「海食遊膳ふくふく」へ向かいました。本来は冬の料理のアンコウ鍋を特別に準備してもらい、いわき名物「メヒカリ」の唐揚げと焼き物をおつまみに話はずみしました。コラーゲンたっぷりのアンコウにも舌鼓を打ちました。

「いわきにてメヒカリつまむ春の旅」

外へ出てTさんの乗用車と路線バスに分乗し、いわき明星大学へ向かいました。十五分ほどで広大なキャンパスに到着。正門の真正面に立派な図書館の建物があり、職員の一さんが迎えてくださいました。図書館は隣の学習セン

ターと繋がっていて、書庫と閲覧スペースがゆったりととられていました。市民にも開放されているようで、春休み中でしたが何人もの利用者が机に向かっていました。Tさんが開館時から携わったという書架には、丁寧に構築された蔵書が明るい陽光のなかに並んでいました。ひろびろとした壁には沖繩の植物をデザインした大きな絵が何枚も掛けられていて、丁度よいアクセントになっていました。外はかなり強い風が吹いていましたが、閲覧室の中は別世界のおちつきでした。(※1)

図書館の隣は二年前に創られた薬学部の校舎で、最先端の設備を見せていただきました。薬剤師の実習スペースや就職の面談練習室のスペースまでありました。またキャンパスの反対側にはガラスのピラミッド型をした温室があり、さまざまな薬草が育てられていました。温室はあいにく中に入ることができませんでしたが、まわりにも多種多様な薬草が栽培されており、あれこれおしゃべりしながらしばし散策しました。

「三月の風キャンパスに吹き渡る」

帰りはまたバスと車の二手に分かれて市内へ戻ります。駅前で降りると目の前に巨大な商業ビルがそびえたち、そのエスカレーターを四階まで登ると図書館の入り口がありました。ここが一昨年十月にオープンした、いわき市立いわき総合図書館です。職員の方が四階と五階のフロア全体に広がる施設を案内してくださいました。開架書架のまわりの閲覧席は利用者で埋まり、平日でもなんと三千人も来館者があるそうです。事務室の中には巨大な自動出納書庫があり、本の大きさとに分けられたボックスにラダムに蔵書が入れられていました。書庫の中をボックスが自動で走る様子は、廊下の窓から利用者が眺めることができます。Tさんは案内してくださいました職員の方といっしょに、この図書館の実現のために長年力を尽くしてこられたそう、**「気がついたら二十五年かかりました」とおっしゃっていました。地域の中で着実に実績を積み重ねてきたTさんの足跡に一同大感激。先駆的な施設と多くの利用者に圧倒されながら図書館を後にしました。(※2)**

「図書館に溢る、人や春の宵」

参加メンバーの一人はここで帰京。次にレンタカーを一台調達しSさんが運転、Tさんの車と二台に分乗して湯本にある旅館古滝屋（ふるたきや）へ向かいました。創業三百十三年という老舗旅館ではゆったりと温泉につかり、ご主人差し入れのカニもたっぷりの夕食を味わい、遅くまで団欒のひと時を過ごしました。(※3)

当初の予定では「フラガール」の舞台になったスバリゾートハワイアンズにも行くはずでしたが、時間切れで残念ながらパス。(※4)

翌朝は一風呂浴びてから宿の裏手にある温泉神社を見学。朝食では名物「サンマのぼうぼう焼き」も味わいました。部屋でコーヒーを飲んでから出発、まずはすぐ隣の野口雨情記念童謡館に立ち寄りました。古滝屋のご主人がやってらっしゃるとのこと、湯本温泉にゆかりのある野口雨情の直筆書幅や童謡資料が所狭しと並べられていました。童謡のSPレコードとラッパ型蓄音機もあり、「青い眼の人形」と「七つの子」をかけてもらいました。入り口の外には菜の花が満開でした。(※5)

「古き歌菜花の家に響きけり」

車に戻り、畑や藪の続く中を走って向かったのは、国宝「願成寺白水阿弥陀堂」。広い庭園の向こうの池を越えると、椋皮葺の阿弥陀堂が佇んでいました。靴を脱いで中へはいると若いご住職が丁度お話をされており、平安末期の阿弥陀像は明治期の廃仏毀釈も無事逃れて現在に至っているとのこと。白水とは平泉の泉の字を分字したそうです。極楽浄土に咲く花が描かれた天井画もありがたく拝んでまいりました。(※6)

「草萌ゆる中に白水阿弥陀堂」

さて次のスポットは常磐炭田の様子を伝える「いわき市石炭・化石館」。ここは六十五歳以上は無料というのでメンバーに確認すると、八人のうち五人が該当者で会計係を喜ばせました。化石や恐竜の展示を年配のボランティアガイドさんが説明してくだり、エレベーターで地下にもぐって往時の炭鉱の展示を見学しました。最初は手で掘っていた石炭を機械で掘るようになった経過や、夫婦で力を合わせていた様子、事務所や生活の有様など、実によくわかりました。外に出ると、昭和天皇が戦後行幸された時の記念碑も見ることができました。常磐炭田は一九七六年に閉山したそうです。(※7)

「八人中五人が無料のどかなり」

「炭鉱の跡に散りぬる桃の花」

ここで二人のメンバーが別れて湯本駅に向かいました。残った六人は車でシーフードレストラン「メヒコ」へ。メキシコで修行されたという社長さん経営の店の真ん中は温室になっていて、なんとフラミンゴが二十四匹ほど飼われていました。ピンクのフラミンゴを見ながら、名物のカニピラフやシーフードスパゲッティなどをゆっくり味わいました。店の前でKさんのカメラで記念撮影となり、一同フラミンゴよろしく片足をあげてパチリ。(※8)

いよいよ最後の目的地、小名浜港へ向かいます。丁度港祭をやっていたので、ちよつと下車して海産物や海魚の水槽などを見学。「サンマ

をきれいに食べるコンテスト」など楽しいイベントの最中でした。すぐ先の海辺にそびえるガラスばりの巨大な建物が「アクアマリンふくしま」。二〇〇〇年に開館したこの福島島の施設は環境水族館という名前がついていて、さまざまな視点から海の姿を教えてくれるしくみになっています。小さな魚だけでなくアザラシ・セイウチ・トド・オットセイなど巨大な生き物の水槽もあり、ダイナミックな生態はいくら見ても飽きませんでした。昨日味わったメヒカリや砂から顔を出しているチンアナゴのユーモラスな姿、そしてシーラカンスの生態調査も印象的でした。(※9)

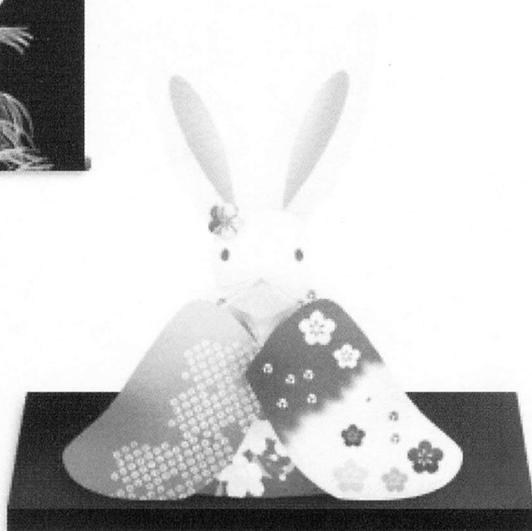
「遠足の顔水槽に映しけり」

おみやげを買いに寄ったのは水族館の隣の「いわき・ら・ら・ミュウ」と名づけられた施設で、海産物をあれこれ仕入れました。(※10) 広い施設をうろうろしているうちにすこし時間をオーバーしたので、大急ぎでいわき市へ戻ってレンタカーを返却し、すっかりお世話になったTさんに別れを告げて高速バスを手配。帰りの便はかなり込んでいて、予定よりすこし遅くなりましたが、予想をはるかに越える有意義で密度の濃かった旅行の余韻をたつぷり味わいながら、帰路につきました。

「山笑ひバスは高速ひた走る」

(文中の句は全て筆者作です)

- ※1 いわき明星大学図書館
<http://www.iwakimnu.ac.jp/library/>
- ※2 いわき市立図書館
<http://library.city.iwaki.fukushima.jp/newlibrary.html>
- ※3 古籠屋 <http://www.furutakiya.com/>
- ※4 スパリゾートハワイアンズ <http://www.hawaiians.co.jp/>
- ※5 野口雨情記念湯本温泉童謡館
<http://www.iwaki-cc.ac.jp/douyou/>
- ※6 白水阿弥陀堂境域（国指定文化財等DB）
<http://www.bunka.go.jp/bSYS/maindetailis.asp>
- ※7 いわき市石炭・化石館
<http://www.sekitankasekikan.or.jp/>
- ※8 シーフードレストラン メロコ
<http://www.mehico.com/>
- ※9 アクアマリン（おへし）
http://www.marine.fks.ed.jp/japanese/top_j.html
- ※10 いわき・ゆ・ら・ニコラ
<http://www.lalamew.jp/www/>



脳卒中からの復帰を目指して

越山 素裕

フォーラムに最初に投稿するタイトルがこのようなものになるとは思っていませんでした。思えば新年をむかえたころから体調面での不調がありました。日常から飲んだ翌朝など、頭痛(宿酔?)ということがありましたので気にはしていませんでした。ただ飲んでもいないのに頭痛がある朝が頻繁になり、市販の頭痛薬を常用するという今思えばとんでもないことをしていました。言い訳できるのであれば「仕事が繁忙で医者に行く時間がとれなかった」ですが、健康をケアするという配慮に欠けていたのは明白です。仕事が一段落する年度末に医者に行こうと決心していたのですが、病気は待ってくれずにその直前、脳卒中で倒れてしまいました。(平成20年の統計によれば、死因順位で3番目に多い数字となっている恐ろしい病気のようです。また毎年約140万人が発病し、人口10万人あたり100名の方が死にいたっているそうです。)脳卒中については

→ <http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/kenkou/seikatu/nousotyu/index.html>
を参考としてください、素人にわかりやすく説明されています。

4月から約3ヶ月間の闘病生活でしたが、お

かげさまで今のところ後遺症もなく、一般人とさほど変わらないレベルまで回復しました。

私の場合、脳卒中といっても脳出血がおき、それが引き金となって脳梗塞が併発したようです。一般に脳卒中(脳梗塞も含む)医療は、急性期、回復期、維持期の3つに分類されるそうです。急性期は発症後約2週間の脳卒中センターでの集中治療、回復期は急性期治療後約2〜6ヶ月間の回復期リハビリテーション治療、維持期は回復期卒業後に一生(数十年間に及ぶ)にわたる機能回復、生活上・維持治療やその支援となります。

ちよつと私の場合でこの経過を振り返ってみることにします。発症した場所が神奈川県ということもあり、救急車で運び込まれた病院は幸いなことに脳卒中診療科がある湘南鎌倉総合病院でした。

ここで発症後容態が落ち着いた2日目から急性期のリハビリが開始されました。と同時に回復期リハビリをする病院探しが始まりました。

家族のことを考えると、東京都内のリハビリ病院がベストなのですが、担当医の先生からは回復期のリハビリは期間をおかずにすぐ実行す

ることがなによりとの指導もあり同じ神奈川県内にある鶴巻温泉病院を紹介され、1週間後に転院することになりました(都内の病院は1ヶ月以上のベッド待ちの状態でした)。

さて急性期のリハビリも入院翌々日から開始され理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の3名がリハビリのお手伝いをしてくれました。

急性期の私の身体状況はいえ、右前頭葉で梗塞が発症したため左半身が麻痺してました。かろうじて左手は動くレベルで左足の感覚はあるのですが、思うようには動かすことができない状態でした。言語障害はいえ、曜日は正確に言えるのですが、記憶力に若干問題ありという言語聴覚士の方のリハビリが必要なレベルでした。

理学療法、作業療法ともベッド上での簡単なもので身体のむきかえる、左手でものをつかむなどが主たるリハビリで、転院前の数日は環境を変える配慮からか新館にあるリハビリ専門ルームでのリハビリをしていただいたことを懐かしく思い出します。

湘南鎌倉総合病院から鶴巻温泉病院への転院が決まり、各療法士の方からの試験(と申して申し送り事項をまとめるために必要だということだそう)があり、記憶レベルは通常に戻っていることが確認されました。ただお見舞いに来ていただいた方の話によれば、声は小さく聞き取りにくかったと言っていました。やはり言語聴覚にも若干の問題はあったのですね。さて転院は介護タクシー&ストレッチャーで行いました。ワンボックスのタクシーの中、サ

ンルーフ越しに桜を見ながら移動した記憶が残っています。

さて鶴巻温泉病院につき、入院手続きを行い、病棟に。看護師さんは専任ではないとのことでしたが、一番はじめに面倒を見ていただいた佐藤(智)さんにはなんだかんだといへんお世話になりました。入院初日はいろいろな検査があり、いよいよ2日目からはリハビリ開始、理学療法と作業療法各1時間のリハビリが毎日の日課となりました。車椅子との生活も始まり、移動は全て車椅子というちよつと気分は身障者(十分に身体障害者ですが)でした。今思えば鶴巻温泉病院での回復期リハビリテーションが劇的な四肢に改善が現われた3週間でした。それは、転院後10日目前後のある日、ベッド上で左足が動き始めたからです。動いたといっても微々たるもので指先がちよつと動いただけですが、そのときの感動は今でも思い出せます。理学療法士の方と大喜びをしたのを覚えています。足がかすかに動きだしてからは理学療法士からの提案もあり、リハビリも1日の理学療法リハビリを2時間に増やしました。足は目に見えて回復し、まず装具がとれ、杖も4本足から1本足へと1週間のうちに歩く運動が楽しくなってきました。

鶴巻温泉病院でのリハビリが3週間目となったときに2回目の転院となりました。自宅と同一区にある初台リハビリテーション病院への転院が急に決まりました。ちようどゴールデンウィークの谷間のこと、タクシーも介護タクシーは手配できずに一般タクシーでの移動となりました。回復期のリハビリは結果的に長期間初台リハビリテーション病院で行うことになりました。約2ヶ月間となるリハビリでしたが、1週間もすると自立して日常動作を行うことが中心のリハビリとなりました。入浴も介助なし、1人で入るようになり屋外歩行訓練も5月末からやり始めました。病院内での歩行訓練は床が平面で突起物はなく歩くことさえできれば問題はありません。しかし、屋外ともなると歩道でもいろいろな形状があり(まして病院は山手通りに面しており道路拡幅工事の最中)、まっすぐ歩くことに注意が必要です。そのため初台リハビリテーション病院では8つの訓練コースが用意されていました。1コースは約150m、2コースは約300m、3コースは約400m、4コースは約500m、5コースは約800m、6コースは約1000m、7コースは約1200m、8コースは約1500mの8コースです。患者さんの症状に応じてこれらのコースを利用して屋外歩行訓練を実施しているそうです。

通常は理学療法で屋外歩行訓練を行うのですが、私の場合、仕事柄ノートPC持参で外出することが多いので作業療法でもカバンを持ちながらの屋外歩行訓練があり、多い日は1日2回の屋外歩行訓練もありました。何故コースが決まっているのか奇異に思い質問したところ、コースを歩いて万一患者さんにトラブルがあったとき、ピッチ(必ず外出時には療法士がピッチを受付で借りていました)で連絡すれば、担当のドクターが駆けつけてくれるという体制になっっている(そういえば、各コースの案内図も借りていました。その案内図には記号がいろいろ書かれており、今いる場所の記号を言えばよいのですよと療法士の方から説明されました)そうです。よくできた仕組みだと思いました。最後の頃になると毎日屋外歩行訓練となり毎日同じコースは飽きてしまい、新宿公園内を散策していました(笑)。明らかにルール違反でしたが、療法士の方も公認でしたから病院としても認めていたのかもしれない。そして回復期のリハビリテーションが終了、退院の日をむかえました。これからは維持期のリハビリ、一生の長い付き合いになりますが頑張っていこうと思っっています。

今回の病気でいろいろな方と知り合うことができました。主治医の方、療法士の方、そして看護師の方、ソーシャルワーカーの方、数多くの方と知り合いましたが、その中で2病院の主治医が「日本の論点2009」に論文を掲載しています。最後にその方の論文のPRをさせていただきます。どうかと思います。

1. 高齢者医療をどうすべきか

澤田石 順(さわだいしじゅん)という医師がこの論文を執筆しています。論文の中にはないですが、ネットでは、この医師の担当する患者さんの半数が後期高齢者医療制度の対象となると告白しています。満65歳以上の身障者は後期高齢者とみなされるそうで、彼が危惧するのは病院サイドが高齢の要リハビリ患者さんを断

る危険性があることだということです。このあたりの主張は本人のホームページを開設していますのでご覧ください。

→ <http://homepage1.nifty.com/jsawa/medical/>

2. 寝たきりをどう防ぐか

酒向 正春 (さけこうまさはる) という医師がこの論文を執筆しています。この医師のお名前はどこかで聞いたとお思いの方もおられると思います。あの長嶋茂雄さんの主治医として有名です。彼の持論は「脳卒中は生命の危険がないと判断した段階からの早いリハビリ開始」です。このために何が必要であるかをこの論文では訴えています。最後に「健康医療福祉都市構想」なるものを発表しています。

→ <http://hsp.ac/img/activity/5csakoh.pdf>

彼はこの論文の中で「ヘルシーロード構想」を謳っています。確かに退院してから週末は自宅周辺をリハビリの一環で散歩していますが、これが意外と苦痛です。目的もなく散歩すること、どの道を歩こうかと考えること自体が面倒になってしまいます。我が家のまわりにもヘルシーロードがあればどんなにリハビリが楽しいものになるか、考えただけでもウキウキします。

「ヘルシーロード構想」では地域産業への貢献も謳われています。私のように個人で散歩に行けるまでに回復していない介助者が必要な人にとっては複数人で歩くヘルシーロードはまた

地元経済の活性化(いろいろな商店で買い物をする、喫茶店で休憩するなど)の起爆剤となるかもしれませんね。

また彼から入院時に省庁間の事務次官会議に呼ばれたという話を聞きました。きっとこの構想の話しをされてきたのだと思います。さいわい今も私の脳外科の担当医です。で今度お会いしたら聞いてみようかと思っています。「健康医療福祉都市構想」のPRになってしまいましたね(笑)。ぜひお読みいただければと思います。

リハビリ病院でのリハビリといっても、2ヶ所の回復期リハビリ病院でのリハビリメニューは異なっていました。ある病院では車椅子ではなく、オパールという歩行補助車を利用 (<http://www.iac-hc.co.jp/products/walkingaid/opal/>) してのリハビリでしたが、他の病院ではこの歩行補助車は左右の足の麻痺程度が同様の場合に有効ということで採用はされませんでした。このようにリハビリメニューも病院毎に異なっているということ、図書館のサービスにも差異があるのと同様だと感じました。

また、3ヶ月の闘病生活は病院内にすることが仕事でしたので、自分の病状はどうなのか、日常どんなことに気をつけなければいけないのかを調べようと思いました。が、そのようなものはネットにはあまりなく、最近病院では患者さんのための図書館を開設しているところが多いというのも患者の立場になって実感しました。

今私は皆様に元氣な姿をお見せできるようお盆明けの完全社会復帰を目指しています。街中で私を見かけられましたら気軽に声をかけていただければと思います。

用語の説明

理学療法士 (PT)

マヒした手足などからの機能的回復に必要な訓練や、座ったり立ったり歩いたり、車いすの操作をするなどの訓練を行う。痛みがある場合は、温熱療法などを行うこともある。

作業療法士 (OT)

自分の身のまわりのことや、家事や仕事に必要な作業など、日常生活での作業ができるように訓練を行う。

言語聴覚士 (ST)

言葉が話せないとか、ものの名前がわからないなどといった症状が出たとき、コミュニケーションをとれるように訓練する。

ソーシャルワーカー

患者さんと家族の、今後の方針などについて、社会的なこと、経済的なことなども含めて相談に乗る。

図書館グッズと選挙グッズ

戸田 光昭

一、はじめに

図書館グッズが話題になっている。その中でも異色なのが、動物グッズである。図書館ネコや図書館カモシカなどの動物は図書館グッズの最近流行の一種とも言える。

図書館グッズを日本で最も早く公式に取り上げたのは、私立大学図書館協会東地区部会研究部企画広報研究分科会であろう。その成果は、『大学図書館研究』八五号（二〇〇九年三月）に掲載されている（武尾亮ほか「共同制作からはじめる図書館広報グッズの作成・創造的な活用と共有をめざして」）。

「図書館グッズ」の使用目的・場面としては、図書館を印象付ける（ポスター、ステッカー、ちらしなどによるアピール。パンフレット、リーフレットの配布。サイン計画）と図書館サービスマン（オリエンテーション、案内デスク、見学ツアー、館内サイン）などが考えられる。

二、動物グッズ

そこで、最近話題の動物グッズの具体例を紹介

介する。動物がグッズであるかどうかという異論はあるが、動物をキャラクターとして扱えば、立派なグッズになる。

まず、図書館ネコ「デューイ」の物語である。このネコは世界的に有名になり、そのデューイを主人公にした本まで出版され、日本語に翻訳された（『図書館ねこデューイ・町を幸せにしたトラねこの物語』（早川書房））。また映画化も企画されている。

図書館ライオンは絵本である。図書館に遊びに来たライオンの話がほほえましい絵本になっている（『としよかんライオン』（岩崎書店））。

そして日本では、図書館にカモシカが現れ、全国ニュースとして新聞にも載った。これが最近絵本になって出版された。富山県船橋村立図書館の『カモシカとしよかん』（桂書房）である。

これらは、動物そのものがグッズであり、それから派生したものが全て、図書館グッズとしての機能を果たしていると言える。

三、選挙用にもグッズが大切

新聞記事（日経夕刊 二〇〇九年七月三十日）によれば、つぎのものが一般的に使われているようである。

・夜に輝くポスター（日中に光を蓄積して、夜も輝く「蓄光ポスター」は晴天が続けば、五、六時間は十分に光るといふ）

・うちわ（法定ビラをうちわ型にして、人前で使ってもらえば、選挙グッズとして有効である。目立つ）

・千社札シール（不特定多数の目に触れない場所に貼る室内用ポスターとして活用できる。バッグや携帯電話機などにも貼れる）

・マグネット（車に候補者名や顔写真を貼るのに便利。ホワイトボードなどにも容易に貼れる）

・プリクラ本人シール（前述の千社札と同様に使える）

・たすき（候補者名を書いたたすきは規制が厳しいが、「本人」と書いた「たすき」なら違法でないという。あの本人は誰だろうというので、話題性もある）

・ペナント・ステッカー（ポスターと同様に

使える)

以上のような選挙グッズの中で、図書館にも応用できるものがあるのではないかと思う。再考してみる価値がありそうだ。

四、学生の「図書館グッズ」イメージ

学生にアンケートで図書館グッズのことを質問したら、一割弱の学生しか、グッズのことを知らなかった。図書館にそんなものがあることを予想もしていなかったようである。

そこで、どんなグッズが欲しいかを聞いたところ、次のような回答があった。

- ・しおり(ペーパーナイフ兼用に人気がある)
- ・ブックカバー(雨でも濡れない材質。紐タイプのしおり付が人気である)
- ・手提げ袋(トートバッグ。マスコットのキャラクター付など各種あり)
- ・小型卓上カレンダー(手軽さが人気)
- ・文房具セット

これらのうちでも、デザインが優れていて、便利で、耐久性のある、しかも日常の役に立つものが望まれていることが分かった。

五、その他の「図書館グッズ」事情

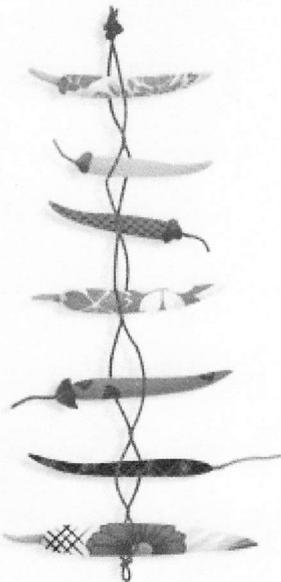
ALA(米国図書館協会)では、様々なグッズを販売しており、出版物と並んで、協会の大きな収益源になっている。そのいくつかを、A

LASTOAのウェブカタログから拾ってみると次のようなものがある。

- ・ポスター(READキャンペーンのポスターをはじめとして、有名人、メジャーなキャラクター、歴史上の人物など、多様なものがある)
- ・しおり(絵本の登場人物をはじめ、多数の種類がある)
- ・キャンペーン用品
- ・贈答品としてのグッズ
- ・成人用記念品
- ・衣類(Tシャツ、帽子、ネクタイなど)
- ・文房具(鉛筆、シャープペン、ボールペン、メモ用紙、ミニノートなど)
- ・雑貨類

最近の国内事例では、「ぞうさんの詩人まどさん百歳展」が二〇〇九年三月から五月にかけて、銀座・教文館で開催され、連日、多くの入場者で賑わっていた。その会場で販売したてぬぐい、トートバッグ、やぎさんゆうびんおてがみセット、一筆箋などにグッズが好評で、売り切れになるものが続出した。

このような状況の中で『大学の図書館』第二十六号(二〇〇九年五月発行)が、特集号として、「ライブラリー・グッズ」を掲載した。これを読むと、最近の事情がよく分かる。



あさがお日記

平井 紀子

七月三日から三日間、駅前で朝顔市が開かれた。

駅前のちょっとした広場に「ふるさと多摩夏祭り」の看板が立ち、所狭しとばかりに朝顔の鉢植えが並ぶ。

夏祭りは、朝顔市に続き八月に「多摩川せいせきの花火」が催される。この街が一番賑わう季節である。

朝顔市では、毎年、一鉢か二鉢買い求め一夏中楽しんでる。買う時は、スーパーの帰りが多く荷物を地べたに置いてしゃがみ込み、念入りに鉢を見定める。どれが蕾をたくさん付けているか、長持ちしそうか、葉や根の具合をしばらく眺める。といつても素人のこと、分かるようでよく分からない。そばには揃いの祭りのはつぴを着て、ねじり鉢巻きをした市のボランティアか、生産者組合の青年らしき若者が、どれにしようか迷っているおばさんたちにアドバイスをしている。なかなか決まらない私に

「決まりましたか？」

「いいえ、どれがいいかしら？ 長持ちしそうなものは」

「奥さん、こちらはどですか。これからですけれど、花芽がいつぱい付いていますよ、花の

色も紫、ピンクと大輪で」と、鉢に刺してあるプラスチック製の札をみせて、笑み満々に鉢を持ち上げた。

結局、お兄さんの選んでくれた鉢にした。最初から聞けばいいのに、たしか昨年もそうだったことを思い出した。

家に帰り、鉢を広げると紙切れが葉のあいだにあり、表には朝顔の写真と花ことば「明日もさわやかに」、裏面には行灯づくりの朝顔のお手入れ管理方法が簡条書きに書いてあった。

私が住んでいる京王線の聖蹟桜ヶ丘は多摩の南部にあり、駅名は桜の名所と明治天皇のお狩場があったことに由来するといわれているが、昔はこの辺はネギ畑だったそうだ。ここに越してきた昭和五年ごろは、駅は今のように入口・西口と分かれてなく、こじんまりした駅舎だったが、特急停車駅なのが気に入る、この地に決めた。

毎年、朝顔市のこの日待っている。

昨年の朝顔は見事な大輪の花を咲かせ、朝起きてみるのが毎日楽しみだった。九月いつぱい咲いていたように憶えている。一〇月過ぎに、すっかり枯れてから種をとり、杯に二〇粒ほど残して来年植えてみようかと採っておいた。

六月に入ってから、二日間水に浸して植木鉢に種を蒔いた。毎朝水をやり、芽が出てくるのを待っていたが、なかなか出てこず駄目かなと思っていたが、週一度の非常勤で大学に出かける日は見ずまいだったが、翌朝見ると、緑の小さい点々が出ていた。緑の点は茎になり、みるみるうちに二葉があらわれ、葉は少し刻みの入った朝顔の葉になっていった。順調に育つかなと思っていたが、翌日昼ごろ見るとびっくりに、葉がすっかり無くなり丸坊主の茎だけになっていった。なんでえ、こんなことあるんだ。虫に喰われてしまったのだ。やっぱり素人が育てるのは難しい。

朝顔はこの時期の花として小唄の世界にもよく唄われている。

朝顔の産地は、いまは東京の台東区や埼玉県岩槻市で多く作られるらしく、台東区では区の花に指定していると聞く。例年七月初旬に入谷に伝統の朝顔市が立つ。

江戸後期、下谷に住む与力谷七右衛門というのが、朝顔を育てることを試みた。この辺の溝土（どぶつち）土質がびつたりのをいかに割合に手がかからず、下級武士には格好な趣味で大いに流行した。競って工夫をこらしているうちに、紅、白、瑠璃、青（紫）、浅葱（紺）、藍、柿などの色合い、縁どり、しぼりなどの変わり種を咲かせた。文化文政頃（一八〇四―一三〇）には記録によれば一六六種にも及んだという。当時としては珍しい花で、求めに応じて種や小鉢を売り家計の足しにもなった。種はもと

もと漢方薬とされていたが、その効能の過大な噂につられて牛一頭と交換したという眉つば話まである。

最盛期は幕末から安政にかけてで、江戸っ子は鉢植の花くらべなどに熱中した。維新の動乱を経て、明治二六年頃からまた復活して、入谷の街道沿いに朝顔市が立ち、盛況を極め東京の名物となった。

朝顔の露がかわかぬうちにと、朝早く市に足を運び鉢をぶら下げて、鶯谷の「笹の雪」で豆腐料理を味わう。オツなものだ。

(平山 健著『小唄江戸散歩』立風書房 一九八八 九三ページより)

露の干(ひ)ぬ間の朝顔を照らす日影のつれなさに あわれ一村雨(ひとむらさめ)のはらはらと降れよかし

(十二世片岡仁左衛門曲)

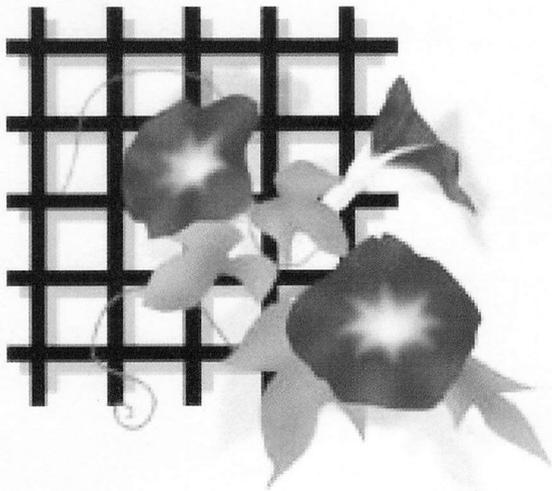
もつと際どい光源氏の世界を彷彿させるような唄もある。

朝顔のからみあいたるつたのなぞ 人には解けぬ神わざの みじか夜から明けしかな

(久保田万太郎詩 山田抄太郎曲)

朝顔の蔓は左巻きだそうだ。今度よく見てみよう。

今年も赤紫に白い筋入りの大輪がたくさん咲くであろうか。



能をまた観る日に

一昨年の四月、サポートフォーラム賞をいただいた折りにお話ししたように、初めの大学は能楽部出身で、謡と笛に興じる能楽三昧の日を送ってしまった。

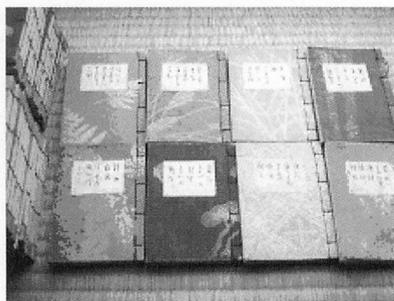
受賞後、本会の幹事の末席に連なるようになると、末吉さん、京藤さんともお話しする機会が増えた。お二人とは二番目の大学の就職説明会の場に講師としてお見えになって以来だから早二十年を越している。京藤さんが仕舞を始められ、あれよあれよと上達されて、草子洗小町の中之舞、舞囃子の舞台を踏まれた。感化されたか、笛はもとより謡は遠いが、なんとなく能を観ることだけははじめたくなった。

学生時代のように漫然と観るには時間もお金も惜しい、きちんと謡本を、謡本が無理でもテキストとしての謡曲を読み込んだ後に能楽堂に向かいたいという気持ち強いのは、図書館の仕事を重ねてきた故だろうか。そのための資料を手許に置かねばならない。かつての謡本はもう手許になかった。あるのは小学館の二巻本の謡曲集。やはり節付けのある謡本、それも宝生流のなければならぬ。宝生の謡本をいかに安く、多くの曲集集めるか、いろいろ思索し、手はじめに謡い所、聞き所を抜粋する小謡本の

水谷 長志

『獨吟花月抄』を金沢の古書店から手に入れた。が、これはあくまでアンソロジー、曲の一部の採録に過ぎない。目的の観能のための資料にはならない。

とこうするうちにネットオークションに全三十六冊各冊五番収録全百八十番の宝生流豆謡本宝生九郎著大正十一年版わんや書店刊が出た。



ネット上でいささかの攻防の末、手にしたのが写真の通り、十一×八センチの袖珍五番本が三十六冊桐の専用箱に納められて届いた。これを持って、ちよっと能楽堂へ、はなかなかの風

情。と喜ぶが、これまで謡本の読みに手こずったことはないし、先に手に入れた昭和八年刊の『花月抄』もいささか古風な活字ながら読めないことはないのに、大正十一年刊のこの豆本のくずし字にはいささか戸惑う有さま。一々、くずし字事典でもないのに、今度は活字本の謡曲集が、それもなるべく百八十番を越す収録のが欲しくなった。

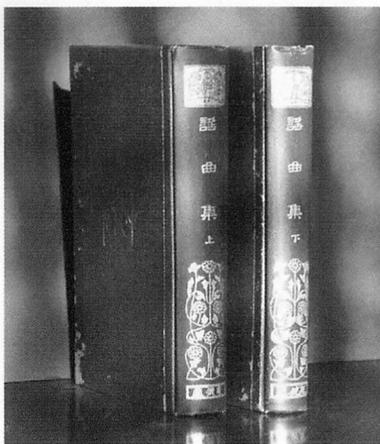
多曲を納める活字謡曲集の代表は、赤尾照文堂の『謡曲二百五十番集』だが、大概、千頁を越す索引とセットになって古書価格五万円はする。とネットを見るうちに、この赤尾照文堂を底本にした「謡曲三百五十番集入力」のプロジェクトを発見。これは金沢美術工芸大学の高橋先生が進めるもので、早速、既入力 of 二百五十番を越す謡曲電子化テキストを得て、自宅のパソコンと携帯できる電子辞書にもコピーして持ち歩けるようになった。これで当面の目的はかなったが、やはり謡曲を本で持たたい気持ちは収まらない。

謡曲集の刊本は小学館の他、岩波書店、講談社、新潮社などいくつもの版があるが、いずれも判型が大きくて携行にはなじまないし、収録曲数も概して少ない。

かつて有朋堂文庫で謡曲集上下巻、狂言集上下巻が出ていた。これは新書版五百頁ほどの体裁ながら収録曲は多い。古書で各冊千五百円程度で手に入れたが、謡曲集の上巻のみまだ手に入らない。もうしばらくこの探書の楽しみは続く。

国立国会図書館のOPACによれば、有朋堂

文庫は有朋堂書店が明治四四年から大正六年にかけて出版した一一六冊の日本古典文学の活字刊本の叢書であり、その全てを塚本哲三が編集したという。



<http://www.venus.dti.ne.jp/~yoz/hondana/hon002.html>より転載

もう少しこの辺をググってみると、「有朋堂文庫の国文編・漢文編のすべてを入手し（全一六二冊）大変嬉しく思っています」という書き込みがあったり、塚本は受験国語界の人物でその『基本漢文解釈法』が復刊リクエストに挙がっていたり、渡部昇一も子どもの頃親しんだという（「人生の出発点は低いほどいい」）。ついでに書くと、最近、高田瑞穂（故人、成城大学名誉教授）のかつての現代国語の受験参考書のベストセラー『新釈現代文』（私も一冊持っています）が、ちくま学芸文庫の一冊として復刊された。

高木市之助の岩波新書『国文学五十年』には、「あの立派な内容見本を先立てて天金総クローズの有朋堂文庫がお目見えしたのですか

ら、読書界がこぞって目を見張ったのは当り前でしよう」という記載もあるそうだ（筆者未見）。

とあるブログでは、「明治四五年新橋発特急備え付けの列車文庫」と題して、『青年小泉信三の日記』（慶應義塾大学出版会）を引用。「大正元年九月一日 八時半の汽車で発つ。（中略）列車の後尾に付いている展望車は、一等客の為に設けたものである。藤椅子を並べて新聞書籍を備え付けてある。それから小図書館の設けもある。日本のもので「かげ草」などがあるのは不思議だ。坪内逍遙の「ハムレット」「リヤ王」などは俗受けするものだから別に何とも思わなかった。漱石の「猫（ポケットサイズ）」は背皮が汚くよごれている。如何に盛んに読まれるかが分かる。その外、大部分を占めるのは帝国文庫、有朋堂文庫等の叢書であつた。かつて日本美術の参考図書としてこの文庫がボストンの学芸員たちに使われていたに違いない。

話がだいぶんそれってしまった。観能に戻すと、春から観た能は、まずは『鶴』（観世、四月二四日、矢来能楽堂）。これは大学四年の最後の発表会の能で地謡をつとめた曲。次は国立能楽堂での蠟燭能『千手』（観世、五月二一日）。千手はさほど面白い能とは思っていなかったが、『林望が能を読む』（集英社文庫）

の解説につられて観に行つた。同演で茂山千五郎の狂言『月見座頭』があつた。月見座頭は二十代の末の頃、演者の記憶はないのだが、深く感興を残した狂言であつて、千手よりもむしろこちらを観たくて千駄ヶ谷に向かつた。極めて複雑な人間観察の狂言と分かる。やはり若氣の理解に過ぎなかつた。七月一七日、同じ国立能楽堂で納涼能『半部』（梅若）。半部は三年の発表会での素謡曲。小品で品の良い、いつ見てもすがすがしい夏の夕のためにある佳曲だ。

そして今楽しみにしているのが九月の横浜能楽堂での『三輪』。三輪は二年の発表会の能で初めて地謡をつとめた曲。憧れの四年生の先輩がシテを演じて、いまも「三輪の山本道もし」の詞章が時々口の端にのぼる思い出の曲。この九月の能会では、私の能観に決定的な影響を与えた『修羅と艶』の著者、馬場あき子さんが「三輪の神婚」のお話しをして下さる。『修羅と艶』を読んでもう三十年以上も経つ。その著者と初めて対面できるなんて、なんと不思議で幸せなことだろう。

いろいろこれからも能を見続けたいが、私にとっての観能は、いまの能を愉しむことであるとともに二十歳のころの自分と謡いつつ歩いたあの北陸の美しい街の通りや空気が雨や雪を思い出すことでもあるようで、嬉しいとともに気恥ずかしい、その感じもまた楽しいという、幾重にも重なる大切な体験なのである。

俳句八吟

卒業証書校長手書きなる五枚

うるせえぞうらやましいぞ猫の恋

山独活ぞ栽培うどのへなちよこめ

脱衣所別浴槽いっしょ春の雪

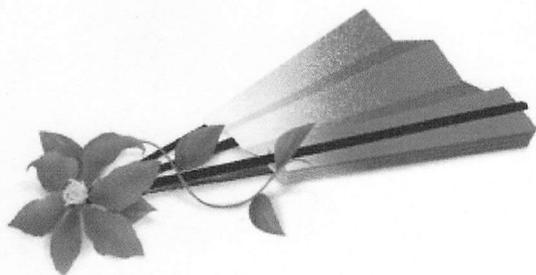
虫聞きの会虫除けのスプレー手に

交りをるきちきちの横控へる雄

酒にせむ秋鯖の縞照りをれば

七草やせりはこべらは庭に摘む

山内明子



不機嫌な人々

人並みに白内障などを患い、手術を受けた。その後、定期的に通院している。病院の待合室に座っていると、いやでも多くの人々の表情が目に入ってくる。驚くのは、不機嫌な表情をしている人が実に多いことだ。体調が悪いから病院に来るので、不機嫌なのは当たり前かもしれない。しかし、犬を連れて家の近くを散歩している時も、同じようなことを感じる。すれ違う人たちが、実に不愛想である。犬が嫌いな人もいると思うので、そういう方々には、すぐそばを通過して申し訳ないという気持ちもある。だが、街の雑踏の中でも、みなさん、実に無表情で黙々と歩いている。

ひとつには、不況や悩みがあるからそんな機嫌の良い顔などしてられない、との事情があるのかもしれない。それなら、バブルのころは、みながニコニコして歩いていたらかという、そういう記憶もない。わが国の伝統的通念として、笑うことは不謹慎だという文化が、残っているのかもしれない。会議や葬儀など、何も言わなくても、深刻な顔をしていれば、何とかその場をやり過ごせる。

しかし、西洋では、事情が異なるようである。「微笑したり首をすくめたりすることは、

山崎 久道

心配事に対する対策として知られている。そして、まったく容易にできるこの運動が、ただちに内蔵の血液循環に変化を与えることに注意するがいい。人は随意に伸びをしたり、あくびをしたりすることができ。これは不安な焦燥に對する最良の体操である」(アラン『幸福論』申田孫一、中村雄二郎訳)ナルホド、心は動かさなくても、手は動かせるのである。

気分や感情は、自分の力で制御できない。つまり、感情は、意馬心猿の語もあるごとく、「内なる自然」である。往年のフランスの名ピアニストのコレットは、ショパンの前奏曲の第8番嬰ハ短調による心象を、「雪は霏霏、風は吼え、嵐は轟々として荒れ狂えども、我心の中にはなお恐しき暴風あり」(東四郎、神保琢一郎『名曲解説全集(上)』)と語っている。

しかし、感情や気分は、直接的にこそコントロールできないまでも、アランの言うように、変化するよう間接的に影響を与えることはできる。ノーマン・カズンスは『500分の1の奇蹟』(松田銃訳)の中で、こっけいな映画や本を見て笑うことが、膠原病からの回復に大いに効果があったと書いている。身近に居る医師に訊いてみても、笑いは治療力や抵抗力を高め

る、と言う。病気になって落ち込んでいるだけでは、いくら薬の力を借りたとしてもそれだけで回復することは覚束ないかも知れない。

多くの先輩方の前で恥ずかしいが、私の大学のゼミのモットーは、「楽しく、しかし厳しく」である。楽しく行うことと、真剣に取り組むことの両立こそが、得がたい財産になると信じている。元氣だから大きな声が出るのではない。大きな声を出しているから元氣になるのである。

図書館サポートフォーラムの会合でいつも思うのは、「笑顔の素敵な方々」が実に多いということである。ここまで長々と私が述べてきたことなど、先刻ご承知なのであろう。そうした意味で、皆さんは、人生の達人なのだと思う。私もその後塵を拝しながら、たのしいコミュニケーション作りをして行ければと思っている。

人生の達人と言えば、私のかつての職場である三菱総研で上司だった故・宮川隆泰さんのことを思い出す。彼がいつも私に言ってくれたのは、「山崎君、仕事は真剣にやらなければならぬけれど、決して深刻になることはないのだよ」。この言葉は、今に至るまで私の座右の銘である。合掌。

— 後 記 —

「ふおーらむ」6号をお送りします。

温暖化の影響で年々夏の暑さが厳しくなっています。秋の実りも盛夏の暑さがあってこそ。今年は記録的豪雨と冷夏で秋の実りが心配されていましたが、後半のお天気で大いぶ盛り返したようで、ほっと胸をなでおろしているところです。

「ふおーらむ」も、会員の皆さんからの寄稿があってこそその賜物。今回も無事刊行することができて、事務局担当としてもうれしい限りです。

図書館や出版を取り巻く状況は加速度的に変化していますが、私共事務局も微力ながら貢献していきたいと思っています。

今後とも皆様ご支援よろしく願いいたします。

(岩本)

6号は岩本君が編集しました。今は営業部所属です。5年前までは編集の仕事に携わっていました。編集力を発揮したものと思っています。

(森本)

ふおーらむ 第6号

2009年9月1日発行

発行人 山崎久道

制作 森本浩介／岩本謙一
齋藤香織

発行所 図書館サポートフォーラム
〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8
日外アソシエーツ（株）内
TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845
http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html
